

咒阻方の法 式次第 小松豊孝太夫記 いざなぎ流御祈禱資料

Research Materials

松尾恒一

〔解題〕

大正十二年、高知県香美郡旧横山村市宇御出身のいざなぎ流太夫小松豊孝氏は、長年伐木を生業としてこられたが、そのかたわら、やはりいざなぎ流の太夫であった父小松達吾を師匠として修行を積み、日月祭等の大祭や山の神・川の神祭り等を行い、あるいは屋祈禱、病人祈禱等々、多くの式法を行い、当村の人々の依頼にこたえてこられた。

同時に、後世への伝承を目的として、自身が学び、修得したいざなぎ流の諸祈禱について、その式法次第や、祭文をはじめとする唱え言の章句等について筆録してこられた。このために特別注文した奉書様の楮紙を袋綴じ装にし、墨書したこれらの記録は、現在、原稿用紙（四百字詰め）百枚前後相当の冊子本が二十冊を超える。本記録は、太夫自身によって行われたいざなぎ流式法の最初の——そしておそらく最後の——体系というべきものであるが、今後のいざなぎ流祈禱研究の土台ともなりうる資料といえる。

本稿はその中の一本『咒阻方の法 式次第』、本文墨付六六丁の記録（袋綴装、縦二八・二厘×横二四・〇厘）の翻刻紹介である。本資料はすでに、小松和彦「いざなぎ流祭文覚帖「呪詛の祭文」」（『春秋』三五

五・三五七・三五八号、平成六年二・四・五月）、高知県立歴史民俗資料館『いざなぎ流の宇宙』（I第三章「呪詛と取り分け儀礼」、梅野光興執筆、平成九年）等でも、一部が引用されているが、研究のための基礎資料として活用し得るように、全文を翻刻紹介するものである。

「呪詛^{スツ}」とは文字通り、「呪詛」を起源とする言葉と考えられるが、物部において語られる「呪詛^{スツ}」とは、怨み・憎しみ・妬み等、他人に対して向けられる攻撃的な心情のことである。特徴的なのは、こうした心情が精霊様の神霊^モとなつて残留し、それが向けられた個人のみならず、共同体にも災いをもたらすと考えられたことで、こうした場合の対処として、いざなぎ流の祈禱が大きな役割を果たしたのである。

本書本文には「咒阻^カ方の法には二通有る」として、次のように整理されるが、

- 1、読み解け・取り解け・被い解で送り鎮める時
- 2、病人^{加持}加治^持祈禱に使ふ時

1は家・集落等、共同体の祈禱の一環として行われる祭儀、2は、病人祈禱において、病氣の原因が他人の呪詛である場合にこれを除却する方法である。

本資料に記されるのは、主に1についてで、病人祈禱における呪詛の除却については、押加持祈禱等、病人祈禱法について詳解される別の冊に記される、という。

1の「読み分け・取り分け・祓い分け」とは、区域の鎮守社の氏神や、家のオンザキ様をはじめとするタカガミ等を祀る大祭において、まずはじめに行われる精進潔斎に相当する儀礼である。

祭を執行するにあたって、障害を及ぼすと考えられる精霊を共同体より除却するために、これらを取り集め、本来あるべき地へと送り返し、あるいは鎮めるのであるが、具体的には「山のモノ」「川のモノ」と称される山の神や・水神の眷属、「四足」「二足」と称される動物霊、「天下正（天刑星）」と称される疫神、さらに、この「呪詛」等がこうした神霊であると想定され、取り分け儀礼が行われるのである。

いざなぎ流や物部における神霊感を特徴づけるものとして、「呪詛」や取り分け儀礼の起源譚ともいうべき提婆流・釈尊流の「呪詛祭文」は早くより注目され、これまでも紹介されてきたが（小松和彦前掲「いざなぎ流祭文覚帖」、斎藤英喜・梅野光興編「いざなぎ流祭文帳」高知県立歴史民俗資料館、平成七年、等）、本書には、ほかに「西山流 月読・日読みの祭文」「七夕法 月読み祭文」「仏法月読流」「女人流」などの呪詛祭文が記される。

この中「西山流」は、狛師が狩猟に関わる呪法によってなされた呪詛、「七夕法」は機織りなど七夕道具を呪具としてなされた呪詛に対するものである。私は、当地における職能者の技術と呪法といった関心より、狛師の法や、七夕道具による呪法についてすでに考究してきたが（拙論「魔群・魔性の潜む山——高知県物部村、西山法・狛師の法をめぐる民俗世界——」「文学」第二巻六号、平成十三年十一月・十二月、「錦の衣と機織りの呪術——物部村の七夕行事といざなぎ流御祈禱——」（国立歴史民俗博物館『歴博』一一六号、平成十五年一月、等）、これらの祭文

は、こうした観点からも興味深い資料といえる。

いざなぎ流の祭儀は、穢らい消し・四季の歌・神道の行い・祭文等、定った詞章の奉唱が重要な部分を占めるが、祭儀を構成するためにはこれのみでは充分ではない。「読み分け」「リカン」などと称する、当座当座によってつくられる、祈願の趣旨に添った願いの言葉があわせ唱えられる。本資料には「其の場に相ふ様に読解を付けて祈る。祭文を祈っただけでは、何のコウ果もない」と記されるが、これらの章句が挿入されて初めて祈禱として成立するわけである。

「よみ解とか、りかんと云ふ文は自分で作文して祈るもの」であるから、これらは本来、書き留められることはない。儀礼の終了とともに、消失してゆく運命にあるが、こうした点で、一例とはいえ、「よみ解」「りかん」などが記録されていることは、祭儀の実際を窺わせる貴重な資料といえるのである。

また、御幣やミテグラ、供物の種類・量、鈴・積梵・道断ち刀などの祭具や、祈りながら、御幣を穀物の入った桶に立ててゆく「御幣解け」の作法、ミテグラに米を撒き供えるタイミングなど、祭儀のハード・ソフト両面についての詳細な解説が加えられている。本書は、いざなぎ流の儀礼のみならず、神霊観と穢れ観・倫理観との交錯の様相を説明する上で多くの情報を含む資料としても、価値を有するものといえるのである。

呪詛やこれに関わる祭儀の究明は、いざなぎ流研究の大きな課題でもあるが、高木啓夫の十年以上にわたる一連の論考（『憑き物としての呪詛と呪詛』（日本民俗研究大系編集委員会編『日本民俗学大系』八巻、國學院大學、昭和六十三年）、「すそ祭文と祝い直し——呪文博士の因縁調伏——」（『土佐民俗』七十号、平成十年）、「すそ祭文とほうめんさまし——弓打ち太夫の因縁調伏——」（『土佐民俗』七十二号、平成十一年）等）が、現在の水準を示す研究としてあげられる。長年の詳細な調査、

数多くの証言に基づきつつ、恐ろしくも不思議な世界に迫った特筆すべき諸論考である。

なお、私は昨年（平成十四年）度、本館民俗研究部の事業として、研究映像「物部の民俗といざなぎ流御祈禱」の制作を担当したが、本資料紹介は、本研究の一環として行うものでもある。

*貴重な資料の閲覧、及び、翻刻を許可下さいました小松豊孝様に深謝し、心より御礼申しあげます。

〔凡例〕

・字体は、正字・異体字・通行字等、でき得る限り、原文に近い字で翻刻した。

・行取りは、本文の改行箇所を尊重しつつも、内容に基づき適宜改めた。その際、唱え言等の詞章は原則として、一字下げ、または二字下げにして、その箇所が明確になるようにした。

・改丁行を、「」によって示し、その下に丁数を記した。ただし、文の途中で改丁の場合のみ、あわせて翻刻文中に改丁箇所を／によって示した。

・句点、読点は、原文を尊重しつつも、意味・内容に基づき適宜改めた。その際、・（中点）に改めた箇所も存す。

・原文には、見出し点として ◎ ○ ○ ○ やこれらに類するいくつかの記号、及び、○囲み数字等が使われている。これらは、朱・墨両様あり、また細竹の断面で印したもの、筆記したもの両様が混在する。これらを正確に区別して再現することは困難であり、でき得るかぎり近い記号によって翻刻した。

・末梢文字は、原則として翻刻せず、抹消文字が存することも示さなかった。

・原文は、現代の用字とはことなる、いわゆる当て字が多く用いられて

いるが、ママ等の注記は最小限に止どめた。翻刻者の注記は右脇に（ ）内に記した。

（国立歴史民俗博物館民俗研究部）
（二〇〇三年六月六日受理、二〇〇三年七月一八日審査終了）

伊弉諾流

国重要無形文化財指定昭和五十五年

咒阻方の法 式次第

紙製人 高知県 香美郡

物部村山崎

平成四年壬申

山崎喜章

特別手漉紙

古文書 書直

高知県 香美郡物部村大栃一、四六七ノ一

出生地 旧檜山村市宇兼ヶ峯 癸亥七十才 小松豊孝

大正十二年三月十日生

目次

一、咒阻の定儀の説明

一、咒阻の祈り法

一、咒阻の読解け取り分け祓い分けの作法 字文のしだい

一、祈禱に入る準備作法

1、ご幣解けの法 2、粗神降し 3、主祀り作法

4、法の枕に幣を建て飾る作法

一、迎向に読む祭文の順番

一、咒阻の読解集る法

祭文 提婆流二通り、 釈尊流、 月読日読流三通り、 西山流、 七夕法、

仏法月読流、 女人流、 咒阻の二双返の法文、

一、祈禱成就した後の作法

今日のごしがたの祓い
ゆうがの祓い

咒阻の祓い集

高田の王子の行い鎮の上印

幣束ミテグサを取り納める作法

幣束に送り鎮めの上印法

天神法の上印及び五印の上印

幣束を納る場所での作法

神送りの方法

法の枕（ヒケイシヨモツ）の納めの法々

一、太咒阻を取り納る祈禱の手法作法

「表紙見返し

○咒阻の定義Ⅱ始まりは印度の釈迦時代とすれば、釈尊返の祭文に、其の由来がよまれて居る。一説には、釈迦と提婆の王が、法争い、けんりよく争いを致したのだと言ふ説も有る。日本でも平安朝の時代に朝廷や皇族方の間で盛ん、調伏（呪い）が行はれたと言、古事記も有る。

古代の人が調伏を掛る法（敷を打つと言）、かやす法（調伏返しと言）、防ぐ法、取りま
とめて鎮める法等、考え出して作った法文が、人々法者によって受けつがれて、現代迄も
傳えられた作法の次第である。良きよろこびでない字文・法文は下法とも荒敷とも、うら
敷とも云い、法力が有るかないかためして／見たり人に頼まれて、つかったりしてはいけ
ない。あゑて行えば、其の身か子孫え其むくいが必ず来るからと言傳て有る。

「一オ

しかし世の中には後々の恐さを考えずに、はら立まぎれに、調伏に當る様な事をする人
も居る。心なくも、その様な目に会って、苦しんで居る人を助けてやる祈禱はいくら行つ
ても良いが、其の為には、裏敷も表式も知って居なければ、直す法文を使ふ事が出来ない
ので有る。

スソとは人同志が口論をして憎しみ合つて、其の念力が相手の身に相ふて、病気に成つ
た時にスソのたゝりと云ふ。

地界チザカイをばい合をして口論し、界公神サカイに不都合に成つて起きた場合に界のスソ

「一ウ

金銭の貸し借りで起きたら、金銭のスソ

あん談で不仲に成って起きたら、あん者のスソ

女にうらみお受けて起きたは、女念の

食物の事で出来たら、喰いけ食ケの

水の事で出来たら、水神の

七夕動且・オリ物・反物で出来たら、七夕の

口論したから必ずスソに成ると言ふのではなく、恨みに思いツケたり、日や時が悪る時に仕場合も有る。又こちらは正當でも、逆恨みに依る場合も有る。個人同士の相柄の事で、公共の事柄ではスソにはならないと言ふ也り。

大咒阻・荒咒阻とは次の時、字文字法を使って調伏をしたもの。

堂宮をアラシて云い度をこめてしたもの

佛にたてついて言い度こめてしたもの

生木に釘を打ったりして行ったもの

天地をにらんで言い度こめて行ったもの

轟やおかまと云ふ処で行ったもの

天神様の動且、金物を使って行ったもの

結果の恐しさを知らない字文字法も、敷法しだいも知らない人でも、しゆ念こめて、知らぬまゝにしても、薬より毒物は良くきく様に、身に相ふ事も有り。不知の者がやったのは、心得の有る法者のしたのより、取り直すのにもつとむづかしいと言ふ。昔の人はくらし向も豊かでなく、変こつ人も多かったので、敷の打ち合いをして、子孫が共だおれに成った家も少くなかったと言。此の事は何百年昔から見たり聞いたり、ためしたりした事柄を云い傳えて来た事で、まちがいの無い事で有る。

太夫・ミコは使われても返す様な事はしないもの。山川の魔郡マ性の者は、元の住かに送り返すが、スソは取り納めて鎮める様に祈るもの也り。

スソの種るいは多種多用だから、スソの祭文も色々有ると云ふ事也り。

○咒阻方の法には二通有る

1、読み解け取り解け祓い解で送り鎮める時

「二オ

2、病人の加治祈禱に使ふ時

幣束^{ヒツ}

- ①、高田の王子 ②、被い幣 ③、公神 ④、山の神 ⑤、水神
⑥、四足 ⑦、スソ ⑦^(マ)、天下生^{テシゲ} ⑧、提婆の人形
○花ミテグラ 太祈禱が必要の時には別に三階のミテぐら
○鳴物 道たち刀(小サイ兼の棒)

供物

取り解の時には、七升と三合のフマ米、五こく 小豆 太豆 ムギ トウキビ アワ
何んでも良い 五通の品、ニツブあてぐらい
ツツマ由(かんけいする家や人の四方の土、神棚等のホコリ、耳^{ミミ}かきの一つ位い)
一枚揃 一戸当り一円でも五円でも可。

七百七拾文の(お金)。七の附く量の金(七千七百トか七百七拾トか)

太祈禱と成る場合には一斗二升、八合八勺米、一貫二百(十二の附く量の金)

病人祈禱の時には幣串が立つだけの量の米、又は他の品(三升か五升)。三合の米^{コメ}。

ツツマ由は、其の家の分と、病人のかみの毛・爪先・エリタモト等の糸クツ少量ツツ。

太祈禱が必要に成れば同じく一斗二升到一貫二百、八合八勺の米、いづれも丸い器に
入れる。病人の時には王子の幣五体の王子。

○咒阻の祈りかた

前もって処定の祈禱を行った上で、スソの番に成った時に始るもの。

引継ぎの字文

○神がもりめ、トウドウ上門の み弟子は十六天の氏子仲場^{ナカバ}え時使^{トキツキ}はれに、日の使はれ
は申して、古るき 世年に いでき申して 屋地三神御神^{ミコノカミ}のザツマ、氏子仲場の、五
尺の体^{カラダ}あうつろい申した南無スソ神 荒やミサキの者を 読解取解祓^{ヨクゲ}い解の前とは相
成り申してござるが 神がもり目の、自法 自力のしだいに、合いまいらせん先き省^{シヨウ}
共には、地神公神様を 元にはじめて、太小神祇様をは コーリの字文で 読みやお
こいて 送りむかえて 御迎向次第も 差上申して 前立て 後ろ立ても頼ふでござ
れば/唯今よりは、南無スソ神の 読解^{ヨクゲ}ケ・取り解^{トリゲ}ケ・祓い解^{ハクゲ}ケの式法しだいの 前

「四オ

「三ウ

「三オ

建後ろ立てを頼みまいらする トウドウ上門の尊様えは御札々と米マキ上ゲてまいらする 米いたゞいて 神がもりめの 前建 後ろ立て 神津の本尊様とも 御成用合召されて 御引継を召されて 神がもり目に 徒名 ヒケイも取らせん 神や仏の御門を倒さん 師匠に 名折も 取らせん如を 頼みまいらする (米マキ上ルの時に、三合米から少量ツマンで、御幣の元にまつる、三回)

是より祭文読に掛る 前折字文

○南無スソ神 荒やミサキの物には 王流 釈迦流 提婆が流 月読日読の流とて 流取数くにごおざはれ共 提婆が流とて 流取り掛けてよみや開いて 参らする

○提婆の祭文にかかる

一チ流の祭文が祈り終った区切の附いた処で、読み解と云ふ字文を祈る。
よみ解とか、りかんと云ふ文は自分で作文して祈るもの。

○取り解・よみ解・祓い解の時のよみわけ

是迄南無スソ神 荒や ミサキの物には 提婆が流とて 流取り掛た 処ぢき 祭文読みや開いて参らした、此の祭文では たん納召されて 十六天の御神のザツマ屋妻に 屋荒神 敷居 かもいに カズラが 結節 継節 千部居 タルキ 万部居 コモヤに 六ツナワハツナワ タタミが と敷とう條敷 おり物反物 七夕動且に 金キン銀 氏子仲場の 五尺の 体に 横木 千才 古木に御縁お掛けて ござろう共 御エンを切らいて御エンをはないて 四幣が ミテグラ 提婆のノ人形 十

「五オ

二のヒナゴ式殿物社 小金の花べら花ミテグラ (三階のミテグラおいた時には) (三階相の五色の仕建) を是のりくらゑ サラサラみあそび用合成り給え トウドウ上門の一の御弟子が 座敷の証に座するからでは ブニ宛さづけるかたゑは ぶに宛授ける ヒケイをよらめるかたゑは ヒケイもよらめる 字文をさづけるかたゑは 字文もさづけて 御定の祭りは取らいて 三丈下り七丈下り 石が堂段 木がセイ段 西宇の国 ハンセン クダラ 世界 ガヤが七本 其の元昔千年 トウドウ上門の尊の 建置クスソの名所え 地は三寸とは買い取り 十三年の年切り掛けて 打ちや鎮めて参らする

時のぶに宛ヒケイに白米千石 黒米千石ノマ米が千石 三千石 ヒケイよらめて 出

「五ウ

「四ウ

まいらした 是受取りて 花ミテグラゑ サラサラ集り用合成り給ゑ (ミテグラに米ツブを少量三回祀り込)

○つゝいて他の祭文を同じ方法にてよみ上げて終つたら、ブニ宛の品は少しづゝふやして行く。

取解の時には、五通位いは読まなければ、クジが取れない。此のへんでクジが取れると思ふ頃に用意した品を全部やる様に祈つて、クジお引いて見る。出来なければ法々を考え見る。

○病人祈祷の時少々読み解が違也り

別儀のしたいでも候わ 神がもりめ字文の博士は (何々の年) 米主病者に 時使はれ日の使はれで 御祈念加治やの次第と 祈り始めてござるが しだいくで病者うつろい申したノ南無スソ神 荒やミサキの、あん切り送り鎮の前とは相成り申して

「六オ

ござるが 神がもりめの自法力に相い参らせんからでは 先きしようともには 地神公神様を 元に始めて王柳 王様 太王 ごづ メボウン太王 天忠姫宮 天竺川上 いざなぎ太神 照天高神 太小神祇様おわ コーリの字文で よみや起いて 七十五本に 相掛向ふ 白葉の御幣 是のりくらゑ 送り迎えて 米まき上げて 御廻向次第も 差上申して 伺い頼ふでござるが しだいくの式法しだいお 相いや叶えて御度候え 頼みまいらす

○トウドウ上門の尊様に御礼々と 米まき上げてまいらす 良き禊で 一の御弟子のたしかな前建・後建 神津の御師匠ノ様とも おなおり用合なされて 一字は教えて 二字つまづかせず 三字に迷いが のうに 七重の神 八重の神津 豊かに三げの法

「六ウ

ともくくまし 字じよ かみから 声れいれいと 祈りおかして 空声読ません 師匠に 名折を取らせん 神や仏の 御門を たおさん 千に一ツも 字文の御弟子が 徒名 ヒケイを取らせん 米主病者に取りては 身に相ふ 御祈禱文 相や叶えて 賜れ 頼まいらす

◎是より先は取割の時とだいたい同じ字文で有るが、米主病者ゑうつろい申した南無スソ神を入れる。

祭文おわりて、あん切りの字文の時 米主病者の五尺の体のあん切りを加えて祈る。

ゑん切りの読分／をねんごろい祈り、ぶにあてヒケイお充分に持たす様に祈らなければ、仲々クジが取れない。」七〇

スソの祈りは提婆流を先によむ。

読分やりかんと云ふ字文は是と云ふ定りはないので、其の場に相ふ様に祈り乍ら考て作文して祈るもので、太夫のむづかしい處。基本は師匠に習つても、教える事の出来ない部分で有る。

(六行空白)

○咒阻の讀解^ワ取解^ワ被^ワい解^ワの作法式次第

- 1、子の日・亥の日・太吉・戌の日・寅の日良くない
 - 2、關係^{カシケイ}する家・氏子からツツマ由集さす
 - 3、幣速用太半紙二十五枚、鈴枳梵、道たち刀
 - 4、幣串用シノベ竹 小筆太の物三尺位いで十本
 - 5、ワラ かるく一トにぎり ミテグラ用 ワラナワ五尺位
 - 6、穀物(麦・トウキビ・米其の他) 七升、七百七十モン(金)、三合米^{フマ}
- 病人祈禱の時の事は病人祈禱の次第で書く
- 1、幣作り

高田の王子 祓幣 公神 山の神 水神 咒阻 四足 天げしょう

ミテグラ幣 天井幣 半枚で切った七、五、三の紙ジメ

提婆の人形

ワラで直径五寸位のわにして、四ヶ所ククル

- 2、王子の幣は一尺五寸の串竹に差す、他は尺二寸。

提婆の人形は七寸か八寸の串に差してワの／一番奥に差す。

ミテグラ幣は四寸の竹に差しワの四方に差す。紙で花ペラを切つて真中に敷、竹串を二本差して、花ペラがおちない様にする。天井紙をミテグラの上にのせる。竹の切りクヅ・幣のたちクヅおミテグラの内に入れて、米ツブ小々入れる。

「八オ

「七ウ

○三階のミテグラが必要な時

1、ワラで作ったワが三個。下が直径五寸、中四寸、上三寸。四処く、つて、花べらの落ちない様に竹串二本ヅ、差す。

幣 半枚を四ツ折りにした紙にて

○公神 ○山の神 ○水神 ○スソ ○四足 ○天下正

と切る。四寸の串に差す。

赤と青の色紙にて

○山岬 ○川岬

の幣を切つて、五寸の竹串に差す。 スソの幣を四枚切る。

一尺五寸の竹串四本。四角にワラのワを五寸かんかくに差す。四寸串に差した幣下五寸にノ五寸に差した幣二本は、中の両脇、上に出た四本の竹にスソの幣四枚を一枚宛に差す。

「ハウ

各々段に花べらを敷く。 ○五大相と云ふ天井紙を切つて一番上にカムセる。敷紙を置いて其上にすゑる。

穀物の入った用器と並べる。此の場合は七升でなく一斗二升到一貫二百、八合八匁が必要と成る也。

次に

○字文の式次第

祭文お讀始める前の字文を、繼はし又は道はしと云ふ。一ツの祭文を讀終つた時点を讀放ちと言ひ、其の後に附ける字文を讀分け、又はりかと言ふ。言葉で表現するのが決りである。讀分・口傳と云ふのは定つた字文でないで、書物に書かずに、口うつしに傳えと言ふ事也。

「九オ

②、行李配り（塩湯配り）何れもこりくばりと読む

こり配りの書物参照

古代にごちそう物を行李に入れて配つて歩いた事からの言葉の傳りで有う。

祈りの内容は、是からはたしかだ々の事をする故、一人の力で叶わんからごちそうを差上るから来て手傳つて下さいと云、案内を、地神公神に始まり、太小神祇に申し傳

える事。

① (汚^{ケガ}らい消^{シヨウ}が) 一番先で、身の汚れを祓ふ意。字文は四、五通、有る。汚い消の書参照。

③ 祓^{ハラヘ}い

神仏の御神の面^{オモテ}・御幣^{ミナモ}・供物^{ソナエ}・太夫の身体・座敷を清めの意と神仏に廻向する意、二通を有す。

通常、三通り・五通・七通。何れかにする定有る。塩祓が一番にアトにする定也り。数通、有る。祓の書参照の事也。

④、神勸請

こりくばりの字文と同じなれ共、こりくばりでねんごろに神仏の名前を読み明して有るので、省略して必要最小限に神仏の名を読む場合も有る。

違ふ処は読分ける時に「のりくら御幣、ヒケイ諸物を是のりくらで、送り迎をしまいらする。いとんよ、しづかにかゝりて、用合成り賜ふと」取解、病人祈禱の時にはとある。

⑤、四季の歌の折り

一月から十二月迄の四節^{シツ}の移り替りの様子を祈りにまとめた字文で、神に廻向に差上げて、はやし立てて迎える意で有る。四季の歌の書を参照の事。

⑦、神道の行い

古代は神道^{カミミチ}の行いと云って居たかも知れない。古い書物には神道とは／すべての根源で有るといつて有る書物も有る。

全剛界・台藏界、両部界を行い下ろいて、神を迎えたと云ふ意で、送り迎に礼をつくる事を意とする。字文は神道の行いの書物参照の事。

此の字文終りて、すなはち読み放ちで、次の様によみ分けを析る。

○是迄神道 ミチハシ一の太神で 送り迎しまいらするが 此の云ふ通りに 落字・ヌケ字・逆字に いれ字が つよくにござると 師匠しだいと わきまを申して いともぎやか いとも見事な 送り迎で 有りたよのおとは 御納就楽を召されて いとんよしづかに 掛りて用合成り賜 神が守目 式方次第を相いや叶て御度候え

「一〇ウ

「九ウ

⑧、御幣解の作法

ミテグラ以外の幣、全部手に持ち、左右に振り乍ら字文

御幣は解ケ解ケ バアシロ バンダイ オンソバカ 三回繰返す

御幣はしゅびよう解け給ふた 東方界 萬々の神様も 四萬々の神様も 此処でまね

けば寄りまする よりて わしませ 神様よ わんぜい わしませ 神様よ たより

はしませ 御本尊たち ○「南方同 西方同 北方同 中方同」五方十二ヶ方同字

文 いとんよ、しづかに 御祈禱殿えは下り入り 用合成り給え

⑨、アラ神下ろし

高き太神は舞ふて 下りさせ賜ふ 其のシマ御祈禱殿では 一チメに神和合を／頼み

参らする ヒクキ神は舞ふて上らせ給 其のシマ御祈禱殿では 一チメに神得合を頼

み参らする 高き神は肩口並べて ヒクキ神は ヒザ口相はせて、神は物相談 仏は

おゆるぎ合せお なされて 御祈禱殿えは 下り入り用合召されて 字文のみ弟子に

徒名ヒケイを取らせん如を頼み参らする

⑩、主祀り字文 米をまき乍ら小量

其の御爲には 東方浄土へ蒔上蒔く 米は東方浄土の主の御いぜん 荒神様の召上

るには トンコにサンコに 礼ブツ礼儀の米 読解・取解・祓解 かななきかくいが

法の米とも米蒔上て 参らする 米いただいて 安座の位いにお直り用合召されて

御祈念／御祈禱相いや叶え賜れ頼みまいらする

○南方浄土、 ○西方浄土、 ○北方浄土、 ○中方浄土

地団国、中段国、天団国、五方五体十二ヶ方共同じ字文

米は三ツブ四ツブていど蒔く

⑪、御幣を幣の元（用器に入れた穀物）建る作法

○ガアシン えいで飾れば へぎが元と成る ガアシン へいで飾れば 伊勢は神明

ミタラシ川とも成る ガアシン へいで飾れば 伊勢は神明 神楽が山とも成る

ガアシン へいで飾れば 神の舞だいと成る ガアシン へいで飾れば 此処もすなは

ち高まが原 御神のザツマ御祈禱殿とも成る

⑫ 此処迄に祓幣・王子の幣・公神の幣を立てる。王子の幣は内向他は外向きに。

○次に山の神の幣

ガアシンへいで立て飾るは 山の神／王太神様えは よみ分け 取り分け 祓い分け
其の御爲に 御札々と へぎや飾りてござれば 眷属集て 七十五本に 相掛向ふ
白葉の御幣 是のりくらゐ サラ／＼みあそび用合成給

○水神の幣

ガアシン へいで飾るは 半徳水神 以下同、

四足の幣

ガアシン へいて飾るは 山のミサキ 川のミサキ 四足・二足の物には 以下同文

スソの幣

ガアシン へいで飾るは 南無スソ神 荒やミサキの物には 以下同文

役神の幣

ガアシン へいで飾るは 天下正殿 天役神 行役神 五津天王ギオン大明神様えは、

同

六道幣

ガアシンへいで飾るは キユウ仙亡者 以下同文

大小神祇様えは 御札々と 米蒔き上げて 参らする 米いたゞいて 安座の位に御
直り／用合召されて 神が守目の御祈念御祈捧 相いや叶えて 賜れ頼み参らする
山に棲んだる 魔性の物 川に棲んだる化性の下道 山のミサキ・川のミサキ 四足・
二足 犬神・サル神・長縄・シソク 病役神 死霊 亡霊 ミサキ 南無スソ神 荒
や ミサキの者にも 時のブニ当て ヒケイに 白米千石 黒米千石 マ米も千石
三千石 是受取りて 提婆の人形十二のヒナゴ 花ミテグラえ サラサラ集り 用合
成り給え

ミテグラの中え 米ツブを入れて祀り込む

○是より恵比須、公神、地神、土隅公神、天神、伊弉諾と、礼儀廻向の次第。是からの祈
捧の数々が成就出来る用に願立も込て読上る作法。是を御定の前と云ふ。

是迄は何の祈捧を行つても、読分が違ふだけで大同小異で有る。一人で行つて居たら二
時間掛る故、一休したく成る。

○中座して再び始る時には、何時でも汚い消から、かんたんに行う次第を、読分で始る物也。

此処で一休して再度此のツギを始る作法。

○先神前に座し拜を行い、汚い消をとゑて、引継の字文

○別儀のしだいでおわしません 神がもりめは十六天の氏子仲場に 時使れで 読解・取解・祓解の式法しだいの儀にてござるが 其の御爲に 先シヨウ共にわ 地神公神様を元に始て 大小神祇様をは こおりの字文で送り迎えて たしかな前建・後ろ立を頼んでござるが 唯今よりは十六天の七間が 奥に祝われまします 二十八社火の神 三十六神清きまつい公神 七十二社が屋の神 十二人が生産の神 二十四人が子安の子恵ぶす 太師七夕 用樂七夕 ランゴウ七夕 乙姫 光る七夕 作る素性が ウカのメ ウカノ方 ウカのおたま（作物のたましいの事）恵比須 大黒福の御神様えは、三処は一チメに御廻向しだいに 御本地 御んヒヨモトを 読や開いて参らする たしかな 前建 後ろ立 御引継を頼み参らする

○是より恵比須祭文を祈る。おわりて

○七間の奥の頂だい社に祝はれわします 恵比須太黒福の御神様えは 御本地 御ん日よ元を くわしく読やひらいて参／らした 三ツに一ツは御い前様え 御廻向次第 御定の前に読や開いて参らした。

三ツに一ツは 読解・取解・祓い解の御祈禱上字に読や開いて参らした。 三つに一ツは 神がもりめの法の枕に読や開いてまいらした よき禊を召されて 式法しだい お相や叶て 後々御廻向次第の御引継をも頼みまいらする

○次は公神様、

しだいしだいで十六天には 白金みはこ 小金の御宝殿に 鎮座まします 公神様え 御本地御廻向次第に 読や開いて参する

公神様の本地を読む おわりて、

○太公神・小公神・八太屋公神様えは 三処は一チメに御本地御ヒオ元は くわしく読や開いて（以下同）

○次は地神様、神の名前だけ読替て（以下同文）

○次は太土偶 神の名を讀替て 以下同文

○次に天神 ヌ

○次に山の神、引継の処は同じで有るが讀分が異なる。祭文の讀放から次の如に、

●山の神大神様えは 御本地御ひおもとは 御廻向しだいに 読みや開いて参らした

良き菰びお召されて 王太神様の御ぶるい 御眷属が十六天の御神のザツマに 屋地
三神に 金^{カネ}さん銀に オリ物 反物 七夕動且に 氏子 仲場の五尺の体^{カラダ}に御縁を掛
けて 引きや雲いて よも候共 黄金^{コウゴン}の花べら 花ミテグラえ 呼や集め 千丈広野
が奥え 御引のけを頼まいらす

御ぶるい御眷属 山の岬川の岬 六ツラホホにノ八面^{ツラ}ホホ 矢行神^{ヤギウジン} 山スレ 狐
狸 サンカの四足 二足 マグン・化性の者が 御縁を掛けてござろう共 御あんお切
らいて 御あんを放いて 黄金^{コウゴン}花べら 花ミテグラえ 諸願成就集り用合成り給 ブ
ニ当ヒケイに 白米千石 黒米千石 ま米も千石 三千石 白餅千枚 黒餅千枚 マ
餅も千枚 三千枚 七字根 七佐古 七谷 木の実 草の実 ガヤの実 姫ガニ フ
キノトウ迄 ヒケイヨラメて出まいらした

是受取りて 奥々丸奥かんびら ひかくが山 王太神様の 千丈羽衣の下ゑ 立ちの
き用合成り給え 此のミコ 一間口より送り出す

○是より道たちの字文で送り出し、クジお見て、送に付くと云クジが出たら、水神様に移
る。

(白丁)

水神様 始のかゝりは神の名を違え同じ。祭文の讀放から、

大川水神 小川水神 野水 白水 轟の水神 一階上りの福の水神様えは 御本地
御祭文お御廻向しだいに 読や開いて 参らした 良き菰を召されて 水神様の御部
類御眷属の者が 屋地三神 御神のザツマ 氏子仲場に 御縁を掛けて ござろう共
黄の花べら 花ミテグラえ 呼や集て 御ひぎ元え 御引のけお 頼み参らす 川
に住だる魔性の者 川の岬 長縄 じそく 川じそくの者が 十六天のあるよの品に

「一六オ

「一五ウ

「一五オ

御神のザツマに 氏子中場に 御縁お掛けて 是り候ふ共 御ゑんお切らいて 御縁
お放いて 黄金の花ミテグラゑ／ 集り用合成り給え プニ当ヒケイに白米千石 黒
米千石 マ米が千石三千石 山の色クヅ川の色クヅ 海の色クヅ 大虫・小虫も ヒ
ケイよらめて 出まいらした 是受取りて お川が七里 三千郷半徳水神様の 千丈
羽衣の下え 立ちのき用合成り給え 此のミコ 一間口お送り出す
以下山の神の時と同様、

次に生霊四足

是に對してあてはめる祭文がないから、恵比須様を頼んで送る。

●引継の字文

生霊・犬神・サル神・四足・二足の送り佛いの上印には 恵比須太黒福の御神様を
前立て後ろ立に 伺い招じ参らする 御廻向しだいに 御祭文おわ 読や開いてま
い

是より祭文お札儀に読／読みおわってから、

恵比須太黒福の御神様えは 悪事の縁切 送佛いの御祈禱上字に読やひらいて 参ら
したが 御法力を持たせ給て 生霊・犬神・サル神・四足・二足の 物がえん掛ない
て おわしますと 小金の花べら 花ミテグラゑ呼びや集めて 送り祓ふて給われ
頼みまいらする 犬神・申神・長繩・四足・二足の物が十六天 御神のザツマ 屋地
三神氏子仲場に 御ゑんを掛けて 引きや雲いて 是有候共 御ゑんを切らいて 御ゑ
んを放いて 黄金の花べら 花ミテグラゑ サラサラ集り用合成り給え プニ当ヒケ
イは 白米・黒米・マ米が千石 三千石 綾が千反 錦が千反 いなぎぬ千反 ヒケ
イ ヨラメテ 出まいらした 是受取て 元の主人の影え 立のき／用合成り給え
此のミコ一間口を送り出す
「一七ウ

以下は他の時と同様 次に伊弉諾様の前

●祭文に掛る迄の道はしのかん

神がもり目 字文の御弟子は十六日へ 時使れは申して、(何の祀り事する爲を附け
加えて)

其の御爲には十六天え うつろい申した 汚い不浄の読解取解祓い解の儀にて ござ

「一七オ

るが 其の御爲には ヒケイ諸物も 取りトウ立てて 七十五本に 相掛向ふ 白葉の御幣もへぎや飾りて 提婆人形 十二のヒナゴも 割りや用合仕立てて こうりの字文で 大小神祇様をは 送り迎えて、祓い清めて 神道みちはし 一ちの太神で御祈禱殿は 送り迎えて 御廻向神楽も 差上申してござるが 王柳王様 太王／五津メウボン太王 天中姫宮 天竺川上み 伊弉諾太神尊様えは 三処がいちめに 御廻向次第に御本地 御日を元を 読や開いてまいらする

(是より伊弉諾の祭文読む オワリテ、

御いぜん様えは 御定の前 御祈禱上字 御廻向しだいと よみや開いて まいらした 良き哉の 御ほし召を なされて賜れ 頼み参らす 神が盛り目は 師匠しだい 一字の読口 習い口では 十六天の御神のザツマ 屋地三神 八百八品の家且様式 金ね 金銀 数も数くな 氏子仲場え 古き世年に うつろい申した。 山のマ群は山のト中え 川のマ群は川のト中え 生霊四足は本人しだいへ 四百四病 八百八病役神 病の神は 東し万万 古丹の里え キウ仙亡者は／西は西方仏の国え 南無スソ神祇は スソの名所え 送り祓いに 送り鎮めの諸式のしだいお しまいらするが かななき字文のみ弟子の自法自力に相いまいらせんからでは たしかな前建後ろ立てに おなおり用合召されて 神がもりめに 徒名ヒケイも取らせん 神や仏の御門をたおさん 師匠に名折も取らさん如を 頼みまいらする

此処で出来るかどうかを九字で引分て見る。

吉と出れば先え進む。凶と出ればどこか手落が有るか、字文が不足か、諸物が不足か有るから良くしらべて、後建の神津も取り直したり、祓ふたり、ことわり立もしたりして、九字が揃迄祈る。

其のまゝにして進んでも、後の事が九字に掛る。

出来る九字が出た上でスソの読ミダシに掛る。

●スソの読乱しの読継

南無スソ神 荒や岬の物おわ 読や乱いて 取りやまとめて 送り鎮の式法次第の前にてござるが 先しよ共には ヒケイ諸物も 取りや揃えて 白葉の御幣も へぎや飾りて 提婆人形十二ヒナゴ 是のりくも割りや仕建て 太小神祇様をは 送り

迎て御廻向次第も 差上申してござるが 前建・後立も頼んでござる トウドウ上門の尊様には みでしの前立て後ろ立 御引継を頼みまいらす 神のもりめに 由法が無ければ由法も附けて 由柄が無ければ 由柄も附けて 読解・取り解・祓い分けで十二のヒナゴえ取りやまとめて 咒阻の社え打ち鎮の式法しだいを させや置かい て 徒名ヒケイは取さん如を 頼みまいらす

○「是より尊様に米蒔上てスソの祭文に移る」

○咒祖の祭文^{スソ} 提婆流^{サイモ}

南無咒祖神 荒やミサキの者には 王流^{スソ}釋迦流^{サイモ} 釋尊流^{スソ} 月読^{ツキヨミ} 日読^{ヒツキ}が流とて 流取り数くにござはれ共 提婆が流とて 流取りかけて しよじきの祭文読みや開いて参らす

(是れ迄はどのスソの祭文を唱えても同じ ツギハシと云ふ)

○提婆の王殿は 日本で いるべ 切るべの いくさに 敗られ 日本を立ち 立ちいで 西に黒雲 東に黒 建ておき 山が七里 川が七里 海が七里 三、七 二十一里は 呼びや シャケばせ給ふて 人間素性^ス 犬猫 牛馬に ちくるいに至る迄 我等が 千丈取り子に 取り干すのおよとは申して しゃけばせ給ふて ござれば 釋迦如来が聞き附け申して 其處を しゃけんで通るは 提婆の王では無いかよ それでは 文部^{ブンブ}の氏子が 助るよおもし成らんがのおよと申して 日月二体の 月日の 月日の 將軍様に けち願^{ガシ}こめまいらして ござるに 月日の將軍様から 示現^{シゲン} おたくがござるに 釋迦如来は前成る ゴンザの川え折り入り用合召^{ヨウカウ}れて 七丁木半^{キナカ} 白葉の眞弓^{マユミ}お張り伏せ 元はす金剛界えは 氏神ゴンゼお 行い下ろいて 末^{スエ}はず台藏界えは ミコ神ゴンゼお 行い下ろいて 一とや重ねの おござの紙は 三神如来のおござの紙とは まねばせ給ふて 一とんや 重ねの御ござの紙には 本代如来の おござの紙とも まねばせ給ふて 四寸二歩の モデ竹は 九万九千の 天の星の命子^{ミコ}とも まねばせ給ふて おり紙大小神祇は村では 一社の氏神様ともまねばせ給ふて 一尺二寸のブチ竹は 大山不動の利鋌の棒とも まねばせ給ふて ナイデンナル神 四方^{ヨナ}ミヂンと 打ちや鳴いて 祈念の御祈念なされば 提婆の王が よりに附かふぞ よりにつけば 次第の願いが有らうぞ 願いが有れば 次第の願いに体いせよと

「二〇ウ」

は 教えにござれば 釈迦如来は 前なるごんざの川え 川洲^{カウズ}に下り入り申して 七
丁木半^{キナカ}の白葉の ま弓を張り伏せ 元はず金剛界えは 氏神^{ウヂガミ}ごんぜお行い下ろいて
末はず台蔵界えは ミコ神^{ミコガミ}ごんぜお行いおろいて 一とんや重ねの御ござの紙えは
三神如来のおござの紙 一トンや重ねのおござの神は 本代如来のおござの紙ともま
ねばせ給ふて 四寸二歩のモヂ竹は 九萬九千の星のミコともまねばせ給ふて おり
紙大小神祇は 村では一神の氏神様の おござの紙ともまねばせ給ふて 一尺二寸の
ブチ竹は 大山不動の利劔の棒とも まねばせ給ふて ないでん鳴る神四方ミヂン
と 打ちや鳴らいて 祈念の御祈念なざるれば 提婆の王 よりにつきまいらして
東し東方 そでぐえ處え ヨモキの柱を建て ウツゲの棟を上げて イタヅリ杜ろの
御殿を みがいて 日々 月々 太い太い 神楽に しゅうやの神楽を 賜はるなれ
ば 広くに 許いてうのおよ 告がわせ給ふに 相取り^{アヒトリ}日のしやく 日取の申され様
には 其れは 大儀にござれば 神の前には 奉神宮 仏の後らな チンジュン堂中
には 小金の主^{アール}じ 荒神三ジヨと 祝を、のおよと申して ござれば 今だが素性^{スセイ}え
傳えて 神の前なる奉神宮 佛の後らなチンジュン堂 中には小金の主^{アール}じ 荒神三
ジヨと祝ふと云ふのが 其のいんねんと／読まれたり。 是迄 王流・釈迦流・釈尊
流とて 流通り数くにおわしませ共 提婆が流とて 流通りかけて よみや開いてま
いらする

是よりすべてのえんを切つてミテグラに集る様に祈る。病人の時ととり分け祈
りの時とは、祈りの読解け・りかんの字文が少し違ふ也り。

○咒祖の祭文 提婆流 其の二

病人用に、又はクジの取れん時

南無咒祖神の 荒らやミサキと申す次第は 神の御世にも いでき始り申さん す
じょうの御世にも いでき始り申さん 昔し 黄金如来^{オウゴン}の佛の御世に 出来や始り申
した黄金如来の仏のおん世に おぢとおいと 失ろんがまいりて 天竺^{テンシク}ゴンザが
川ですじよと 三月九十二日の いるべ きるべの戦／さをしまいらすれば 提婆王
殿が 系性^{ケイセイ}の戦に負けられ申して 弓矢を ミヂンにつみ祈りへし折り ゴンザが川
え 投げ捨て申して 東に黒雲 西に白雲立ておき 天竺^{テンシク}太小荒やミサキと 日本え

「二二オ」
「二二ウ」

立ちうき申して 年性しだい 相性しだいに 行き相い 来相を 申しまいらすれば

文部の氏子は はしかし 是れ何事ぞ 有らふやのうとは 日本をまわり有る ト
オドウジョモンの博士の尊が 占えのうよと申してござれば 日本をまわる トオド
ウジョモンの尊が 良くよく占い判じて 見まいらするに 別儀のしだいでおわしま
せん 天竺提婆の王が 日本えおり入り年性しだい 相性しだいに 行き相い来相をな
すと 見えるが 是れでは 人間素性 世次のしだいも 切れ行き申さう ごこくの

「二三ウ

種子も切れ行き申さう 犬猫牛馬の種子も切れ行き申さう それそうござればと申し
て ミコが千人 ホコウが千人 法者が千人 三千人を揃えて 東し東方の天の岩戸
えかけいり申して 二体の月日の將軍様えも 相談しまいらするに 二体の月日の將
軍様の申され用には 天竺提婆の王が 日本え 下り入り申して 年性しだい相性し
だい 行き合い来合いを しまいらすれば 日本で氏子のしそもも 切れ行き申さう

ごこくの種子も切れ行き 中馬の種子も 切れ行き申さうによりて ミコが千人

ホコウが千人 法者も千人三千人は 三千人は三丈川原え おり入り申して 七丁

木中の弓伏せ ツル／打ち掛けて ツル打ち浄土と祈りよれば 提婆の王が よりに

「二三オ

つかふが よりにつけば 次第の願いが 有らうぞ しだいの願いに 体せよのうと

お、せられ 其の御時に ミコが千人 ホコウが千人 法者が千人三千人が 三丈

川原え 下り入り用合なされて 七丁木半 弓張り伏せて ツル打ち掛けて ツル打

ち浄土と 祈りよると 提婆の王がよりについて 我等が相手のかたきは 糧をたち

葉をは枯らす 千丈取り子に 取りや伏せうのおとは申せば 其のおん時に 提

婆の王様 願いが有らうが 願いに体して 進んじよのうと お、せんだられてござ

れば 提婆の王が 素性が我等に願いを体して 呉れるでならば 神の前なる 奉

「二三ウ

神宮 仏の後ろな チンジン堂 中には 荒神三所と 祝い込め 子そんゑ傳えて

お祝い祀りが 有れば 三千世界は広くに 許さう それそう無ければ 千丈取り子

に 取るよと 申してござれば それそうござれば 神の前なる奉神宮 仏の後ろな

チンジン堂 中には 小金の荒神 三所と祝い込めて 子そんゑ傳えて お祝い祀り

も 差上げ申さう 三千世界を広くに許いて給われ まだにて 安くな願いがござれ

ば 願いに体して進んで まだにもすじょうが 願いお体して くれるでならば 秋

夏 鎌のかい切り したほの祀り ほんや彼岸の おゝじきくどくの祀りが有れば
人間種子も 許いて取ら／しよう牛馬の きうとく種子も 許いて取らす 千丈取り
子にする事 三千世界を広くに 許いて取らす すじょうの 門もたおれん 南無咒
租神祇に 秋夏鎌のかいきり初ほ ほんや彼岸に 大食くどくの祭りを取らすと さ
し上げ申すは 提婆の王の願いの たたと云ふのが 其のいんねんとも よまれ
たり

「二四オ

是より其の場に相ふ様によりみ解をつけて、祈りゑん切りをして、ミテグラに集
めて、ぶにあて、ひけいをよらめて、咒祖の名所を送り鎮める様に祈るもの。

次の祭文中の釈尊とは、釈迦牟尼世尊の略読で、上の一字、下の一字取り釈尊と呼名、
サンスクリット語。仏汰とは佛教のサトリを開いた人の呼名と言。

○咒祖の祭文 釈尊がやし

昔し 足原国の ご代の仏の御世に よつぎがなくして 釈迦如来が 相續召すのが
良からうろうのうよと 告がわせ賜えば 釈迦如来は 三十余りて 四十の はぐき
が きわまる迄に 我子が無くして 足原国の 御代の御世は 受取る事には成らん
が のうよと申され給えば それそうござれば おいの提婆の王に 相続召すのが
良からう のおよと 告がわせ給ふに 提婆の王殿は三十余りて 四十のはぐきがき
わまる迄に 妻の后きがなくして 足原国の御世を受取る事には成らんが のうよと
告がはせ給えば 西国仏を 見まいらすれば 二人の姫君有りまいらして 姉姫君は
片目トンボ 片目明らか 姉姫君見まいらすれば 両眼まなこ 明らかにて 頃を
申せば秋の月 姿を申せば 春の花 玉をみがいた良いや姫にてござれば 是こそ提
婆の王の妻の后に 良からう のうよと 告がわせ給ふて 三月三日 人を使い 五月
五日仲人立て、 九月九日に 仲人御引き合せお到いて ござれば 釈迦如来の妻の
后きの申され用には 足原国の仏の御世が 人手に渡るが のうよと 世次を授けて
賜はれのうよと 日月二体の將軍様に 結願こめ参らして ござれば 一の段では
口が違い 二の段上り 三の段では 月のかんせい めぐりが止り 是何事で 有ら
うよ のおとは となりの八十老婆に 御問いなさるに 其れは ツワリの始めで
ござろう 七十五品のツワリの願いに 体せよのお とも告がせ給ふて 釈迦如来

「二五オ

「二四ウ

の申され用には 提婆の王は 我等に 七十五品の ツワリの願いを 体いして

呉るでなれば 足原国の 御世を 渡そうのおよと 告わせ 給えば 先づ一食いた

い物は 何ぞと御問いなさるに 十二月 ケンプなしが食い度い のおよと 告せ給

ふに 提婆の王は 登りゑ 七里 (二十八K) 下りゑ七里 沖の 太海浜の マサ

ゴの おあらん限り たづねて 南部の 打上には 一とふさ有りまいらして 取っ

て来て進んずれば 是は甘くな物 しわす ケンプナシとは 是の事かと なぞめの

御毘お召され まだにて 食い度い物は何ぞと お問いなさるれば 師走 やぶも、

食いたいのおよと 告はせ給ゑば 提婆の王は 登え七里 下ゑ七里 沖の太海

浜の眞砂が おあらん限り たづねて 見まいらすれども 何處にて 師走やぶもモ

は ござらん寒や イチゴを盛りや 集めて 進んづるに 是こそ 師走やぶもモ

うまきな甘きな物よ 師走やぶもモとは 是の事がと なぞめの御毘を召されて ま

だにて食いたい 物は何ぞと お問いなさるに 師走 竹の子が 食いたい のおよ

告せ給ふに 提婆の王は 登え七里 下り七里 沖の太海浜の眞砂の おあらん限

り たづねて見まいらしたが 何處にて 師走竹の子は ないに依りて 手グワおさ

「二六オ

「二六ウ

「二六エ

「二六カ

「二六キ

「二六ク

「二六ケ

「二六コ

「二六サ

「二六シ

「二六ス

「二六セ

「二六ソ

「二六タ

下らせ給ふて 此の矢止と申すは 地に立てれば 地神の神に恐れにござる 山の神に恐れにござる 川ゑ建れば 半徳水神に 恐れにござる 道ゑ立てれば道陸神に恐れにござる 海ゑ立てれば 八大海竜宮に恐れにござる 村ゑ建れば 氏神諸神に恐れにござる がのおよと申して 前成る ござが川の 川洲に 海山川の み汐界に 少しのすき間が有りまいらして 見手を千人 聞き手を千人／言いてを千人三千人の 見物人の中より 矢走り 七間建て置申して 矢止は建てまいらして おぢの提婆の王殿申され用には おいの釈尊若君殿は足原国の 仏の御世お 一ト手に押生えまい 天がのおては 雨が降るまい 泉口ミナトのうては 水が出まい 先祖がのうては 住屋が傳ゑんとあて おぢの提婆の王は 足原国の仏の御世を 一ト手に押んで 受取れ 其共 太小神祇に伺い頼で 伺い掛けて 受取れのおよと 告せ給ゑば 我等の弓矢と申すは 黒兼ユウ／＼ 八人張り 八人力 ハバ八寸 マチ六寸 矢

タキの長さが 二尺五寸の 弓矢に まがいがない 神や仏はいらんやのおとは申して／ 弓矢をかまゑて 上げ八巻で もろはだ おしぬぎ うれ配合 元配合 中は ジンパと 弓矢は よれ合ふ如くに 足原国の御世は 一ト手の物よとエンヤラエンと掛声掛けて 引かせ給ゑば 其の矢は こ空はるかに いにふて申した。 おぢの提婆の 王の申され用には 我等射いたに 矢切がないが おいの釈尊若君殿には 足原国の 仏の御世を ひと手に 押んで 受取れのおよと 告せ給ふに 釈尊若君殿の申され用には おぢの提婆の王が 黒兼 ユウ／＼ 八人張り 八人力の弓矢で射いたに 矢切がないのに 我等が赤兼 ヨオ々々 一人張り 一人力の弓 シノベ竹の矢で射いても 矢物が有るうはずはなけれど／其れでも 式法次第の儀にてござれば おごうで 受取り申そうのうよと 告はせ給て 釈尊若君 東し東方浄土トウホウ向いて

東方浄 主アルジの荒神御いぜん様 足原国の御世を 早速 射ちや取らいて給れのうよと 三べん札拝差上げ おがませ給ふて

南み南方浄土ミナミゑ向いて南方浄土の 以下 同
西し西方浄土セイゑ向いて西方浄土の 以下 同
北た北方浄土キタゑ向いて北方浄土の 以下 同

中方 浄土を向いて中方浄土の

以下 同

地団国を向わり申して 地神公神様

以下 同

中団国を向はれ申して 中団国の主じの荒神 以下 同

天段国を向はり申して日月二体の月日の將軍様

〃

赤兼ヨウ々々 一人張り 一人力の シノベ竹の矢を／かまゑて 双はだ押ぬき 上

「二九オ

げ八巻で うれはいごう 元はいごお 中はじんばと 弓矢は よれ相ふ 如くに

エンヤラエンと 掛声かけて 引かせ給ゑば 白兼戸平を七枚 黄兼の戸平を七枚

サラハのくわを七枚 三、七、二十一枚 ズンプと 射ぬき申した 其の御時に 見

物人 百性三千人が 告がはせ用には 提婆の王が 黒兼 ユウ々々 八人張り 八

人力の弓矢で射いたに 矢切が無いのに おいの釈尊若君殿が 赤兼ヨウ々々 一人

張一人力 弓矢で 白兼戸平を七枚 黄兼の戸平を七枚 サラハのくわを七枚 三、

七、二十一枚 ズンプと射ぬき申した あのこと ござん なされよ おいが おちに

「二九ウ

も まさるか 年が そう領にも 成るかよ 枯木に 再花とは あれの事かよ／

足を歩み鳴らし 手を打鳴らいて さんばらばんと 笑はせ給ば おいの釈尊若君殿

の申され用には おちの提婆の王殿よ もう一矢 射いてござん なされよ 白兼戸

平を七枚 黄兼の戸平を七枚 サラハのくわを七枚 ズンプと射ぬき 申したなれば

足原国の ごだいの御世は ニツ分けよ のうよと 告わせ給ふに おちの提婆の

王は よくや しよけの 深さに 黒兼ヨウ々々 八人張り 八人力 ハバ八寸 ま

ち六寸 矢たきの長サが 二尺五寸の 弓矢をかまゑて もろはだ おしぬき 上げ

八巻で うれはいごう 元はいごう 中はジンバと 弓矢はよれ相ふ如くに 足原国

の ごだいの御世は ニツ分けのうよと エンヤラ エンと掛声掛けて引かせ給ふ

「三〇オ

に／ 其の矢は チンにくだけて 姑空はるかに 舞いや上らせ給ゑば 今の矢は

何處へ行つたかと 空をござん なざるれば 両眼まなこえ 落ち入り申した。提

婆の王殿申され用には 我等の用な 不悪き者は無い 足原国の御世は よう受取ら

んが 我等が両目まなこは 射ち取り申した 我等が用な不悪者は 親兄弟が 有る

ぞと云ふても 親兄弟の 家ゑも行かれん 他人の家ゑはなをも行かれん のうよと

告がわせ給ふて ほらきに はらは立てて 鬼神の作した サイボウ刀で モトド

い拂ふて 釈迦如来の みひぎに投入れ申して 親十代より渡りた はだの守りを
おいの釈尊 若君の かたに投げ掛け 川ごとくしとは／性を替えて シャア／と
さけんで 姑空^{コウ} はるかに 飛びふて 申してござれば おぢの提婆の王の つれさ
せ給ふた 妻の后が あんまりうらみに申して 昨日や今日に求し 氏や男を むな
しゅう したのは 誰故也 行ぞなれば おいの釈尊若君 故にて ござれば 調伏^{テウブツ}
でのては かなわん のうよと 告せ給ふて トウドウジヨモンの尊殿を使い参ら
して 太調伏^{ダイテウブツ}の式次第が 有るかよ のうとは 告がはせ給ふに 有るが有るとも
云え共 有るが有るとも 一まんが 無いが ないともつまんが 任た事ないが
諸物は有るかと 告せ給に 諸物はどれ程入るかと 告せ給に アヤが千反 錦が千
反 イナギヌ千反 三千反 五方の供が 五百五升／ 地天の供が 七百七升合して
一貫二百に 一斗二升到 八合八匁^{シヤク} 鬼神の作りに サイボウ刀が 入るぞと告
せ給えば 諸物は安くに 取りとゝゑて進づるに 當堂上門の尊様は サンジヨの
川ゑ おり入り サカサマ川を作りて 段を飾りて^{カサ} 四、二、三、ジメお引きやまわ
いて はだかわくをすゑて 白き こぎぬを さかしにきせて さかやキャハンに
さかやワラヂをはかいて 十の山から 十のこずゑお 折りや合いて 七ナツの山か
ら 七ツのコズエも 折りや相いて くない用成る したおなめ出し むらさき用
なる タンをはき出し 水花三度と ケ上げ ケ下ろし 太調伏の 御祈念致せば
釈尊若君殿の 身に相い申して 腰より上みが 三病ワツライ／ 腰より下が 五色
のワツライ 一枚半敷ならでに ね伏 はれ伏し申して 百八人の祈りの字文の ミ
コも使ふて 祈れど 祈りも叶わん 當堂上門尊を 使い下ろいて 太調伏の調伏の
御祈念式法しだいは 有るかよのうとも 御問いなさるに 太調伏式法しだいは
有るとは云え共 有るが有るにも ないがないにも つまんが 任した事ないが
諸物は 有るかと 告がわせ給えば 諸物は どれ程入るかと つがわせ給ふに ア
ヤガ千反 錦が千反 イナギヌ千反 三千反 五方の供えが五百五升 地天の供ゑ
が七百七升 合して 一貫二百に一斗二升到 八合八匁 鬼神の作りた サイボウ刀
が／入るぞと告せ給ふに 諸物がなくして 村七軒をまわりて 裏のかんじなさるれ
ば 小豆が六斗六升 太豆が三斗三升 アヤガ千反 錦が千反 イナギヌ千反 三千

「三〇ウ

「三二オ

「三二ウ

「三二オ

反 鬼神の作りた サイボウ刀も出来まいらして 諸物も と、のい申しまいらせ給

へば トウドウジョモンの尊殿は 三所^{サンジョ}が川原に おり入り召されて サカサマ川を

作りて はだかわくをすゑ 白きこぎぬを さかさに着せて さかや毛半 さかやわ

らぢおはかして さげおを さかしにつかして 段を飾りて 四、二、三ジメを引き

やまわいて シメの足には毒ジャのホネ迄 はさんで さかや人形 さかしにつかい

て 十の山から十のコスエも折りや合いて 七ツの山から 七ツのコズエも折や合

いて むらさき用なる タンおはき出し くない用なるしたおなめ出し 水花三度

と ケ上げ ケもどし 太調伏の調伏返し^{ツツ}の御祈念なさるれば おいの釈尊若君殿は

早速 平ユウ成りまいらして おぢの提婆の王のつれされ給へる 妻の后に身に合

申して 腰より上が三病わづらい 腰より下もが五色のわづらい 一枚半敷ならでに

ね伏し はれ伏し申して 百八人の祈りのジョモンも使ふて祈れど 祈りも叶わん

百八人のい者も使ふて くすれど くすりも叶わん 百八人のキョウ者も使ふて

キユウおすれ共 キユウも叶わん 仁王^{ニョウ}御前に 川原人とも 名附けたり 仁王^{ニョウ}ござ

んに川原人とは 何の事 三病わづらふ人 今だが す性に傳えて 三病わづらい

身に受け申した人には 直すミコも い者・キユ者も 薬もないと 云ふのも 其の

いんねん 地界 口争^{クチカ}の こうろんをすれば 咒祖に成るのも 其のいんねん 調伏

返に 直しが つかんと言ふのも 其のいんねんとも 読れたり

此の祭文は、トウドウジョモンの尊に廻向に成る。祭文咒祖の式次を始めた法者

は堂堂上門の尊、取り納めるにも、右の尊を頼まなくては出来ない。

其の場に相ふ様に、読解を附けて祈る。祭文を祈つただけでは、何のコウ果もな

い。

「三三ウ

○咒祖の祭文 月読日読の祭文

「月読日読の文は、何月何日に何年の年の者が、何事をして咒祖に成つて居るかを、月別に読解る意を目的とした祭文也り」 ツイテ本文

○正月子の日に 子の年の者が 子の地^チの方 一生一代行かずが方えまいりて 地^チ敵

ね敵^{カキ} 念ずる敵が 有るぞと言ふて 火を打ち掛け 大麻^{オホノサ} 打掛け 向ふな 相手

の 胆^{キモ}先三寸 血花に咲けよと申して 八幡矢切りの法迄 行い掛けて いん念 調伏

ないたる 南無咒祖神 炎の岬の物でもござるか 良に御聞き候え

二月丑の日に 丑の年の者が 丑の地 一生一代行かずが方え参りて 以下同文

三月寅の年の者が 寅の地の方 一生一代行かずが方 同

四月卯年の者が 卯の地の方 一生行かずが方 以下同文

五月辰の年の者が 辰の日に 辰の地 一生一代行かずが方

六月巳の日に 巳の年の者が 巳の地 一生一代行かずが方

七月丑の日に 丑年の者が 丑の地 一生一代行かずが方

八月未の日に 未の年の者が 未の地 一生一代行かずが方

九月申の日に 申の年の者が 申の地 一生一代行かずが方

十月酉の日に 酉年の者が 酉の地 一生一代行かずが方

十一月戌の日に 戌年の者が 戌の地 一生一代行かずが方

十二月亥の日に 亥年の者が 亥の地 一生一代行かずが方

参りて地敵 ね敵 念ずる敵が有るぞと言ふて 火を打ち掛て 大麻打掛け 向ふな

相手の 胆先三寸 血花に咲けよと申して 八幡矢切の法迄 行いかけて いんねん

調伏ないたる 南無咒祖神祇 炎／みさきの者にて ござるか 良くに御聞き候え

○咒祖の祭文 同じく月読流 其の二

正月子の日に 子の年の者が 子の地の方 一生一代行かずが里え参りて 字敵 地

が敵・ね敵 念じる敵が有るよと申して ヒ竹サラメク サラワク さかや人形 さ

かや刀を使ふて いん念調伏ないたる 南無咒祖神祇にござるか 良くに御聞き候え

二月丑の日に 丑の年の者が 丑の地の方 一生一代行かずが里え参りて 同

三月寅の日 寅の年の者が 寅の地 一生一代行かずが里 以下同

四月卯の日に 卯の年の者が 卯の地 一生一代行かずが里

五月辰の日に 辰の年の者が 辰の地 一生一代行かずが里

六月巳の日に 巳の年の者が 巳の地 一生一代行かずが里

七月午の日に 午の年の者が 午の地 一生一代行かずが里

八月未の日に 未年の者 未の地 一生一代行かずが里 以下同

九月申の日に 申年の者 申の地 一生一代行かずが里 以下同文

「三四オ

「三四ウ

「三五オ

十月酉トウの日に 酉年の者が 酉の地 一生一代行かずが里え参りて 〃
 十一月戌イヌの日に 戌年の者が 戌の地 一生一代行かずが里 〃
 十二月亥イタの日に 亥年の者が 亥の地の方 一生一代行かずが里え参りて 字敵 地
 がたき ね敵 念ずる敵が 有るぞと申して 火竹 サラメク サラワク 逆や人形
 逆や刀を使ふて 因念 調伏 ないたる 南無咒祖神祇でござるか 良くに御聞候
 「是よりすべての物・品・處・人・住家のエン切りを祈つて、ミテグラに集めて、
 ヒケイおよらめて、スソの都え十三年の年切掛けて鎮る用に祈る。どの流も太同小
 異で同じで有る」

「三五ウ

○咒祖祭文 西山流 月読日よみの祭文

此の文は獵師が西山法、獵師の法を使ふて出来た呪祖に對してよみミダス祭文也。

○正月子の年の者が 子の地の方 一生一代行かずが里参りて 字敵 ね敵 念ずる敵
 が有るぞと 言ふて 朝日を招いて 夕日を招いて 日を打ち掛けて 月打掛けて 麻アサ
 (ノサ) 打掛けて 料本トカシしたい 向ふの 相手の胆先三寸 サザラにソバカと 打つた
 が 打ち敷掛けたが 掛敷 南無咒祖神祇に炎ホノのミサキ 言ふたが 言いどの ミサ
 キが是有り候ふ共 今日獵師の法では よみやひらいて参らする 屋地三神 ご神ミコの
 ザツマに御縁を掛けて 引きや雲いて 是有候共 御縁を切らいて 四幣がミテグラ

提婆の人形 十二のヒナゴゑ 集り用合成り給え

「三六オ

二月丑の年の者が 丑の地の方 一生一代行かずが里え 〃同
 三月寅の年の者が 寅の地の方 一生一代行かずが里え 以下同文
 四月卯の年の者が 卯の地の方 一生一代行かずが里え 〃
 五月辰の年の者が 辰の地の方 以下右と同文
 六月巳の年の者が 巳の地の方 〃
 七月午の年の者が 午の地の方 〃
 八月未の年の者が 未の地の方 〃
 九月申の年の者が 申の地の方 〃
 十月酉の年の者が 酉の地の方 〃

十一月戌の年の者が 戌の地の方 〃
十二月亥の年の者が 亥の地の方 一生一代行かずが里えまいりて

○咒祖の祭文 七夕法月統祭文

此の文は七夕様の動且（ハタオりの品々）を使ふて出来たスソで、女人のうらみの場合が多い。

○正月子の日に子の年の者が 子の方一生一代行かず里えまいりて 字敵 ね敵 念ず
る敵が 有るよと申して アセ竹も取りや揃えて 十の山から 十の梢も取りや合
て 七ツの山から 七ツの梢も 取りやそろえて サラオサ 逆や人形 逆や刀を
使ふて 人は悪けれ 我身は よかれと申して 因念調伏ないたる 南無スソ神 炎
のミサキに行き相い 是有り候共 身はだおはないて 黄兼の花べら 花ミテグラ
提婆の人形 是れのりくらえ サラ／＼みあそび用合成り給

「三七オ

二月丑の日に 丑の年の者が 一生一代行かずが里え参りて 同
三月寅の年の者が 寅の方 一生一代行かずが里え参りて 同
四月卯の年の者が 卯の方 〃

五月辰の年の者が 辰の地の方 〃
六月巳の年の者が 巳の地の方 〃
七月午の年の者が 午の日に 〃

八月未の日に 未の年の者が 未が方 〃
九月申の日に 申の年の者が 申の方 〃
十月酉の日に 酉の年の者が 酉の方 〃

十一月戌の日に 戌の年の者が 戌の方 〃
十二月亥の日 亥の年の者が 亥の方 一生一代行かずが方 行かずが里えまいりて

地敵 字がたき ねかたき 念ずるかたきが 有るよと申して アセ竹も 取りや揃
えて 十の山から 十の梢も 取りや合いて 七ツの山から 七ナツの梢も取りや合
いて サラオサ 逆や人形 逆や刀を使ふて 人は悪けれ 我身は良けれと申して

因念 てうぶく 南無スソ神 ホノホのミサキに 行き相い 是有り候／供 身はだ

「三六ウ

お 放いて 黄兼の花ベラ 花ミテグラ 提婆の人形 是の のりくらえ サラサラ 三セウ
みあそび用合成り給え (主に病人用)

○咒祖の祭文 仏法月読流

佛・ツカ・墓等を、タテについての咒祖

○正月子の年の者が 子の地の方 一生一代行かずが 里えまいりて 子の方角に 向
わり申して 地敵 字敵 ね敵 念ずるかたきが 有るぞと 申して 四方そとばに
けづり仕立て 逆番附けに 書きやしるして 七枚 ソト婆も削り仕立て 逆番付に
書きや記るして 七ツの墓を ツツいて 地にて地神 荒神 ないかと 申して よ
みや起いて かたきを仇つて 厄をドドメて 生血を／すゑて 子孫たえ行け 番孫
たゑ行けと 言ふたが 云いどのミサキ 立つたが 本念^{ホノネ}炎のミサキの見入れ
シヨケが是あり候共 今日釈迦の コミコが供り申して 仏法此の祭文で よみや集
めて参らす

二月丑の年の年の者が 丑の地の方 一生一代行かずが里え^{マイリ}参て 丑の方角に向はり
申して 以下同

三月寅の年の年の者が 寅の地の方 一生一代行かずが里え参りて 寅の方角に向わり申
して 以下同文

四月卯の年の年の者が 卯の地の方 一生行かずが里え^{マイリ}参て 卯の方角に向り申して
以下同文

五月辰の年の年の者が 辰の地の方 一生一代行かずが里えまいりて 辰の方角に向り申
して 以下同

六月巳の年の年の者が 巳の地の方 一生一代行かずが里えまいりて 巳の方角に向り
申して 以下同文 「三八ウ

七七月午の年の年の者が 午の地の方 一生一代行かずが里えまいりて 午の方角に向わ
り申して 以下同文

八月未の年の年の者が 未の地の方 一生一代行かずが方 行かずが里えまいりて 未の
方角に向り申して 同

九月申^{サル}年の年の者が 申の地の方 一生一代行かずが里えまいりて 申の方角に向はり申

して 以下同文

十月酉^{とり}年の者が 酉^{とり}の地の方 一生一代行かすが里へまいりて 酉^{とり}の方角に向わり申して 以下同文

十一月戌^い年の者が 戌^いの地の方 一生一代行かすが里へまいりて 戌^いの方角に向わり申して 以下同文

十二月亥^い年の者が 亥^いの地の方 一生一代行かすが里へまいりて 亥^いの方角に向わり申して 地^{カタキ}仇 字仇 ね仇 念ずる仇が 有るぞと申して 四方 ソト婆に削り仕立て 逆番附に 書きや記^{シル}して 七ナツの墓を ツツいて 地にて地神 荒神 無いかと 申して よみやおこいて かたきを 射^つつて 厄をトドめて 生血をすゑて 子孫たえ行け ばんそんたゑ行けと 言ふたが 云いどの ミサキ 立つたが 本念^{ホン} 炎^ホのミサキの 見入れショウケが 是有り候共 今日釈迦のこみこが 供り申して 佛法 此の祭文で よみや集めてまいらする (是よりエン切り集メル)

○咒祖の祭文 女人柳

此の祭文は女人のうらによりて出来たスソの取りまとめに必要也。

太郎・次郎と言ふのは長男・次男と云ふ意也。

○正月太郎 月に申^{サレ}年の者が 巳^ミの地の者に向わり 神の鳥居え血文字を書き 仏のまなこえ針を差し 堂宮荒らいて 水花三度と け上げ け下ろし 人は悪けれ 我身はよけれと申して 荒神 けみだし サラ血の法文^{ホミ} ヌキ字を使ふて 逆字をつこうて 因念 調伏致いて 是有り候共 七本ミテグラ 九ツが人形 ごこく 一枚揃えに 七ツの鳴物 道絶刀に 三千石のヒケイ諸物 七本カゴミテグラ 九ツの人形割りきらためた。言ふたが云いどのミサキ 立ツタが ほのほのミサキ 南無スソ神ノ祇は 御縁を切らいて 是ののりくらゑ サラサラ みあそび 用合集り用合成

「四〇オ
り給え

二月次郎月に 酉^{とり}の年の者が 卯^うの年の者に向り申して、以下同

「三九ウ

三月三郎月に 戌^{イヌ}の年の人が 辰^{タツ}の年の者に向り申して、以下同文

四月四郎月に 亥^イの年の人が 巳^ミの年の者に向り申して

五月五郎月に 子^ネの年の人が 午^{ウマ}の年の者に向り申して

六月六郎月に 丑^{ウシ}の年の人が 未^{ヒツジ}の年の者に向り申して

七月七郎月に 申^{サル}の年の人が 寅^{トウ}の年の者に向り申して

八月八郎月に 酉^{トリ}の年の人が 卯^ウの年の者に向り申して

十月十郎月に 亥^イの年の人が 巳^ミの年の者に向り申して

十一月十一郎月に 子^ネの年の人が 午^{ウマ}の年の者に向り申して

十二月十二郎月に 丑^{ウシ}の年の人が 未^{ヒツジ}の年の者に向り申して

神の鳥居え血文字を書き 以下同文

○咒阻の一双返の祭文 宗石吉三郎方便

この法はみだりに使ふべからず。

数通り有る祭文をよんで、縁切^{ツギ}をして集めて、ぶにあて・ヒケイおよらめて、祀りはづいて、送り鎮めるべし。

敷を使つて有れば、敷を敷の杜え上げて、字文を使つて有れば、字文を消して、神や佛をたてについて有れば、神仏はことわり立ておして本座え直す。

他の悪魔・下道^ゲのものとよれて、もつて居れば、取り分けて、色々と手をつくして見た上で、最後の手段として行え。

返しだから、十二支のエトお亥からよみ始、子でおわる様に祈る。

○亥の日 亥の年の 男か女が 亥の日 亥の方角^{ムカフ}に向り申して ウツゲの 逆グイ

七本逆しに立て、 四方 ソト婆を 逆しに立て、 サミダレがみお 四方え バラ

リと さばき立て 三十三枚 白ハ^{シラ}を 食いしめ ぬれ手を 三、三、九度と 打や

開いて ムラサキ様成る 胆をはき出し クレナイ様なる シタお クイ出し 天地

おまねいて 太地をゆるがし 神の元では 神をたてつき 仏の元では 仏をたてつ

き 人は悪けれ おのれは 良けれと申して 因念調伏せんと 言い度 云い立て

是有り候 字文の博士が キンクの ミフマで さがし出したぞ 當所處に 氏神

「四一オ

「四〇ウ

氏佛は 無いかよ 良くに御聞き候え／ 字文の博士は 時使はれ 日の使はれに
「四二ウ」
使い **アヤマリジ** 取られて 咒阻の 一 双返をしまいらする

一トスソ集めて ニタスソ返すぞ ニタスソ集めて 三スソと返すぞ
三スソ集めて四スソと返す

「以下」四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、「同じ」

十二スソ集めて 一 双返しに返すぞ おん念 返に返すぞ 小念 返に返すぞ 血花
ス波 返に 生霊 返に返すぞ 太師 七夕 からわく 返に 返すぞ 向ふ相
手が なくては かなわん

元本人 からだに 返す 本人からだが なければ 其の子に返す 其の子が無けれ
ば 其の地に返す 其の地もなければ 植木ツギ木に返す 植木ツギ木もなければ
「四二オ」

川の中の 大場の 岩の上で 北を枕に刀をぬき 石原通しに 送り返すぞ
方角違えな 敷地違へな 国を違えな 元本人むねのレンゲえ 一時にソバカ 御ん
切り返しに 送り返いて 御んたび候え

・戌の日 戌の年の男女が 戌の日 戌の方角に向り申して 同

・酉の日 酉の年の男女が 酉の日 酉の方角に向り申して 同

・申の日 申の年の男女が 申の日 申の方角に向り申して 同

・未の日 未の年の男女が 未の日 未の方角に向り申して 同

・午の日 午の年の男女が 午の日 午の方角に向り申して 同

・巳の日 巳の年の男女が 巳の日 巳の方角に向り申して 同

辰の日 辰の年の男女が 辰の日 辰の方角に向り申して 〃

寅の日 寅の年の男女が 寅の日 寅の方角に向り申して 〃

丑の日 丑の年の男女が 丑の日 丑の方角に向り申して 〃

子の日 子の年の男女が 子の日 子の方角に向り申して うづげの逆ぐい七本

さかしに立てて 以下同文

次に

●一荷敷掛けて 入り来た 其の式成れば 二か敷き掛けて 入り来た 其の敷なれば
四か式かけて送ろう 四荷敷かけて 入り来た 其の敷なれば 八か式かけて送ろう

八かしきかけて 入り来た 其のしきなれば 十六か式かけて送ろう (以下はばい掛の数にて、百二十四か式迄かけて祈る)

○一人力を掛けて 入り来た敷なれば 二人力を掛けて送ろう 二人力を掛けて 入り来た其の敷なれば 四人力をかけて送ろう (以下はばい掛に百二十八人力迄祈る)

神の童子が 六太童子 仏の童子も六太童子 お日の童子も六太童子 お月の童子も六太童子 不動の童子／も 六太童子 ちけんの童子が六太童子 六、六、三十六太 童子 ばいそう ばいがけ掛けて くつほね返しに 送り返いて 参らする

●是よりよみ分集めて鎮める様に祈る、りかんとも言

●是迄 南無呪阻神祇 荒やミサキの物には 一返しの祭文 よみや開いて 参らし

た。此の祭文では ホオメン さまいて 四幣が ミテグラ 提婆の人形 十二のヒナコゑ 集り用合成り給え 十六天の 三神屋ツマに 御神のザツマに 八百八品の 家且 用敷に おり物 反物 金ネ 金銀に ごゑんを掛けて ござろう共 植木 千才古木に 塚 墓 仏のザツマに 御えんを掛けて ござろう共 山川 四足

二足と よれてもつれて よも候共 十二ヶ年の氏子仲場 米主 病者に／ 御ゑん 四三ウ

んを掛けて ござろう共 花ミテグラゑ ごゑんを切らいて ごゑんをはないて サラサラ集り 用合成り給え プニアテ ヒケイは 白米千石 黒米千石 マ米が千石

ヒケイヨラメテ 出まいらした。 まだにも ヒケイが おろかに ござれば ま

だにも ヒケイがおろかに ござれば 屋地の四方のツツマユ ごこく一枚揃えに

道たち刀に レイシヤクボン いろりの灰い だろ迄も ひけい よられて 出ま

いらした。 まだにも ヒケイがおろかに ござれば 病者のえり先 そで先 たも

と先き ぴんの毛 二十の爪先迄も ヒケイよらめて 出まいらした。 是受取りを

なされて 四幣が ミテグラ 提婆の人形 式殿 御社 壱の休場で 三條下り

七丈下り 石が せいだん 古木の／ 元ガヤが七本 昔千年 トウドウ上門の尊の

建て置く 咒阻の 名所え 地は三寸とは 買い取り申して 十三年の年切り掛けて

送り鎮め 打ちやしづめて 参らする 鎮り行け 鎮り用合成り給え おわり

プニアテの品を言ふ度に、米ツブ小々、ツマンでミテグラの中に祀り込む作法をそえ

ここでトウドウ上門の尊様におうかがいを立て、クジお見て、送りには付くと言ふクジがおりたら、トウドウ上門の尊様に、米まき上げて頼ふで送りしづめて、道たちの字文となえるもの也り。

「四四ウ

○読解・取解・祓い解の祈禱の時に、咒阻の九字が取れて、送に附くと言ふ時から、後仕末迄の作法。

先づクジが取れた時の字文

◎チエ ブツサイ 降る法 照る法 仏法 皆用合 安楽 チソウ殿 是をこそ チツト 五万シャンナア 皆用合 トロソク トロソクでんと 鎮り行ケ 鎮り用合成り給え(三回繰り返す)

トウドウ上門の尊に釈尊返の祭文を廻向に読んで、縁切り送り鎮を頼む。

神がもりめは 時使はれ 日の使はれで 南無スソ神 荒やミサキの物をは よみやみだいて 四幣がミテグラ 提婆の人形 十二のヒナゴゑ 読や集めて ござるがトウドウ上門の尊様には スソの名所え 送り鎮を頼みまいらす 其の御為には御本地 御ヒヨ元は 御廻向次第に 読や開いてまいらす。

「四五オ

(是より釈尊返を読む) おわりて

◎南無スソ神 荒やミサキの者には 王柳 釋迦柳 釋尊柳 提婆柳 月読・日読とて柳取り掛けて ショジキの祭文 よみや開いて 四幣がミテグラ 提婆の人形 十二のヒナゴに 読や集めて ブニ宛授けて ヒケイもよらめて 字文も對してござるが まだにて 残した者が 是有るなれば 氏子仲場の 家内 三神家妻の 御縁も切らいて 御神ざつま 八百八品の 家皿用式 七夕動且 門公神 角公神 植木千才古木の 御縁も切らいて 兼 金銀に 氏子仲場の五尺の体の 御縁も切らいて 七十五本 白紙御幣 ヒケイ諸 太夫の持つたる てう愛い てうたから 御祈禱殿 有るよの品の 御縁を切らいて 御縁をはないて 四幣がミテグラ 提地の人形 式殿 御社 ほおらの社え 七ツの鳴物 札釈梵の此の鳴るかたえ 三千ヒビク方え 諸願成就 集りみあそび 用合成り給え

「四五ウ

一トスソ集めた ニタスソ集め 三スソ集め 四スソ集めた 五スソ集めた 六スソ

集めた 七、八、九、十、十一、同十二スソ集めた 東方 マリマリ 明梵^{メイボツ} ダラリ
ヤソバカ

南方同 西方同 北同 中同^{チュウ} 五方マリマリ 明梵^{メイボツ} ダラヤソバカと 四幣がミテグ
ラ十二のヒナゴゑ 諸願成就 集りみあそび 用合成成り給え

○（注訳）礼釈梵と云ふのは良くヒツク不要に成つた茶ワンを最初に用意スル。ごこく
を黒こげに焼く。道たち刀はヘンピツ太の鎌の棒。五、六寸位の長サ／用意しておいて、
ミテグラに集入れた時からたゞき始める。是をタタキ集めると云ふ。おわりてスソをミテ
グラに祓い集める祓い（京のごしかたの祓）から、ゆうがの祓いを祈る間は、建て有る幣
の内、高田の幣をのぞいて、右手に持つてミテぐらの前を左右に祈りに合せて振り乍ら字
文をと見える。

○京のごしがたの祓い

東方にも ギヨウ／しん ほんギヨウカイの 其處に 海山川をつもり 流れ出で
ると申せ共 しも千丈では ちりお祓ふ 七福 五幅の たのしみ有り うす桜^{サクラ} 心
ザクラは にごる共 不浄の祓いは 此処でする 不浄たちは 何時もあらされ 金^{カネ}
じょう 三ごん 祭幣^{サツヒ} 幸いと 今日のごしがたの／祓いを申せば 君^{キミ}の心も陽氣
身はすゞしく かるらんと成る 千福七福 シュウ身吉日 明合如来やソバカと 祓
いおといてまいらする

南方にも 同

西方にも 同

北方にも 同

中方にも 同字文

次に（ゆうがの祓い）

●南無スソ神 荒やミサキの物をは ユウガの祓いで 祓い集めてまいらする

東し とう方より 古き不浄に 新き不浄に 古きけがれに 新いきけがれに 七ヶ
村里のけがれに 村七斬^{ムラナナ}のけがれに 余なる 災なん 悪霊 死霊 亡霊 悪魔の
見入りが 是り候う共 東方^{トウホウ} 本草に からまぐさ カントウ まくさに からまぐ
さ けいとうま草／ 継ま草 文永ダラリヤ オンソバカ 王ジョウ ダラリヤ

ジョウダラリ 南條被いで 被い落いて ゆうがの被いで 被い集て参らする

南み なん方 (以下同文)

西し さい方 同

北た ほん方 (同)

空^{ソラ}ら 中^{ナカ}方 (以下同文)

●東しとう方にも、こお法院なあ 法院ナア 安楽 ギゾオ殿 フル法 照る法 仏法
安楽 ギゾオ殿 コレ方こそ チット 五シヤンナ― 皆用合 トロソク トソソク
でん

四幣がミテグラ 提婆の人形 是のりくらゑ 集り用合成り給え

南 なん方 同

西し さい方 同

北た ほん方 同

空^{ソラ} 中^{ナカ}方 同

終つて待つた幣をミテグラにかむせ置いて、高田の王子を鎮の上印に行ふ。

「四七ウ

○高田の王子の祭文

王子の行いの本に書く事とする。其の本を参照すべし。

但し読解は、南無咒阻神の送り鎮の上印に行ふ事をよみ分けて行ふ事。

●次に王子の幣だけ残いて、すべての幣速一ヶ所にまとめて、印明・印観を結び乍ら、小
声にて字文を唱える。(人に聞えん様に)

一、車の印にて 東方車の印と 現じ渡らせ組

南方(同)、西方(同)、北方(同)、中方(同)

五方十二が方車にソバカ

二、金目の印にて 千五郎 萬五方時 五郎様を 行^{オコナ}い奉る式の使いは 清^{セイメイ}明金目にソ
バカ 東方金目 南方金目 西方金目 北方金目 中方金目 五方十二ヶ方 御ん
金目にソバカノ 悪魔下道は 是のミテラに いざとまれ

「四八オ

三、金しばりの印にて 東方しばる 南方 しばる 西方しばる 北方しばる 中方し
ばる 九ヨウ掛る ぐれん、けんばい きりやかすみ印にて しつかと結む

はつかと掛る ヤク金目の印と 行い下ろす

四、此の印と申すは 三日 七日 十三日 七十五日の間

かみお解いても 此の印解ズ

帯をトイでも 此の印解ズ

ヒモお解いても 此の印解ズ

ユビおヌイでも 此の印解ズ

棒お取っても 此の印解ズ

川を渡りて 此の印解ズ

五、方十二ヶ方から 三目ギリ ソウ身ギリ／を相掛候共 セツメイ 金目に ソバカ

と結み止めたぞ ツナギ止たぞ 解ホドケ ヌケヤ返り 解ケヤ返り とけほどけ

ると 事よもあらしますな 建つて守り シウケン 相叶て御度候

注 此処で全部紙にツツム。前以つて用意して置いたナワにてククル。

六、不動 オンサン からのめ ナワを 以つて 東方シバル 南シバル 西方シバル

北方シバル 中方シバル 五方十二ヶ方から シツカとからめた はつかと から

めた 不動サンサン 金目のナワを以つて 東方カナメタ 西方カナメタ 南方カ

ナメタ 北方カナメタ 中方カナメタ 五方十二ヶ方から シツカと金目た 解ケ

ナ ホドケナ 御ンギリリンにソバカ

唱え乍らククル。

繩は楮の皮が良い。ない時にわワラ。筆の太さ位いで、五尺グライの長さ(約二米有バ

充分)。

次に丸めて、ククツタ、ミテグラ、従に置ク。

ズをワにして上におく。其の上に小刀もおく。

米ツプお小量おき乍ら、小声にて次の字文を析ル。

1、門公神 角公神様に 米まき上げて参らす 向ふをはるかに明けて 後をツメテ

御度候え

2、道を通りて ドウロク神様 米マキ上げて参らす 以下同文

3、山を通ると 山の神様え 川を渡ると 半徳水神様え おん札々と 米まき上げて

「四九オ

参らする 向を明けて 後をつめて おん度候え
4、海を渡りて 八太海竜宮様え 同文

次に太小神祇をふんじ鎮の上印に行ふ。

錫杖を鳴し乍ら折る時の声にて

●南無スソ神 荒や岬のふんじ鎮の是上印 数もかすくな 師匠次に行い 招じ参らする
東し 東方から 天照太神 八幡 春日の明神様をは ふんじ鎮の是上印に 行
い招じ参らする

南み 南方からは 日天コウシン 御如来様お ふんじ鎮の 是上印に 行い招じ参
らする

西し 西方からは 南無十三体御本尊様お ふんじ鎮の 三ンコン 是上印に 行い
招じ参らする

北た 北方から 金の神をわ ふんじ鎮の三ンこん 是上印に 行い招じ参らする
空ら 中方から 日月二体の 月日の將軍星の神を ふんじ鎮の三ンこん 是上印に

日本一チ目／の弘法大師の御本尊様をも 三処はいちめに 行い招じまいらする

地にて 地神公神 地太 土偶公神様 以下同文

中にて 仲太將軍 天にて 天代將軍様 以下同文

東し 東方 イザナギ太神命様

南み 南方 イザナミ太神命様

西し 西方から ボデンの命 釈迦の命

北た 北方から カラトの命様

空 中方から 九万九千の星の命

五方五体十二ヶ方から 昔中頃 今当代の 五性の性得た ミコ神様 村でも 一社
郷でも 一社国では 太社の大小神祇様をは 三処は いちめに ふんじ鎮の三ンコン

是上印に 行い招じまいらする

太天満天神読む読む御神様をも／ ふんじ鎮の三ンコン 是上印に行い招じ参らす
る 御廻向しだいに 御本地 御んヒオ元に 相掛け向ふ 五方立を読や開いて 参
らする

「四九ウ

「五〇ウ

○天神の五方立を唱える おわりて

太天満天神 読字の御神様の御法力で フンジ鎮の是上印と お直り用合召され 神がモリメに 千に一つも徒名ヒケいお 取らさん如くを頼み参らす 此の云ふ通り お相や叶せ 下んやされるで なれば 神がもりめは シメ冬ごもり 枯木が山 世年の 替る 其の御時には 式の御膳を 差上げ 祓いの数も 七十五流^{ナカレ} 祭文数も 七十五流れ 御廻向しだいと 読みや開いて 太願祈請^{ダクガン}の 受約速の申しほどきは いとも見事に 事ものにぎやか 差上申す／ 此の受約束は ウンは申さん すら 事申さん スラ事申さん 身をまき込ての大願祈請で有るに依て まとやの御聞入れを召されて ふんじ鎮の是上印に 頼みまいらす

○是より五印鎮め

右手に米ツブ少しにぎり、左手をツツにしてツツンダ鎮物の上にのせ、更に右手をのせる(ツツコの印と云フ)

鎮の字文 小声にて

- ①、東し 東方 公神の經には ヒンニヤア ビンニヤア ヤギヨウ公神 イッシ ブツ シおんむら ぶんしら ぶんしら とう とうと 土末代鎮り用合成り給え
南み 南方(同文) 西し 西方(同文) 北た 北方(同文) 空ら 中方(同文) 「五二ウ
- ②、東し 東方 コオシンの經には ヒンニヤア ビンニヤア／ ギヒンニヤ キチヒン ニヤ ヤ行コオシン オンムラ ツンシラ トウト 土末代鎮り用合成り給え
南み 南方 同 西し 西方 同 北タ 北方 空 中方 同文
- ③、東 インボオ オンボ 御神法 タモウ デンナア カミ土 太三ゴン シモ土 小三ゴン カタ神道 小三ゴント 土末代打ツて鎮る
南 ナン方 同 西 サイ方 同 北 ホン方 同 空 中方 同
- ④、我こそは東山獵師 西山獵師 中尾獵師 西山日天 シゲサス獵師にて うたがい処が候はん 東し 東方にもフィショウ ゴシキ 日天 フィショオドウ 天照太神 八幡宮 春日太明神 日本三処の神が おあらん限り ツウシント鎮り行ケ
東 西 南 北 空ラ中方 以下同字文
- ⑤、東し 東方 王レウ(家の内の鎮は玉りと云ふ) キンダチ カイリウ 羊 土チ

「五二オ

土チと 土チ末代打って鎮る

南 南方 西 西方 北 北方 空 中方 同字文

此処でにぎった米ツブお全部左手を通して落ス

○次に五ツの印かんを結んで、セキガコイおする。

①、釵ぎ印にて 東方 釵の印と 現じ渡らせ給え

南 西北 中方 同字文

②、バラ文の印にて 東方 バラ文の印とも 現じ渡らせ給え

南 西北 中方 同字文

③、アジロの印にて 東方 アジロの印とも 現じ渡らせ給え

南 西北 中方 同字文

④、金わの印にて 東方 金わの印と 現じ渡らせ給え

南 西北 中方 同字文

⑤、岩の印にて 東方 岩の印と 現じ渡らせ給え

南 西北 中 同文

岩の上にこけ打ち生ゑたぞ オン ノメリンに ソバカ 三回

次に釵の印にて

一ツ関打ツ 二関打ツ 三、四、五、六、七、八、九関打ツて 打ち止て 又とふた
たび伏しおどろき もどり返は 是有り候ふな 十二ヒナゴノ太神と 掛置参らす

○次にかすみの印にて 字文

此のかんなき神が守目が ふんじ鎮めて 其の後 五方十二ヶ方の 百八の友柄 出
家太夫 ミコ 法者が 打たん打敷を 打掛 伏しおどろけと 因念 調伏 さわり
を致す共 二度迄は聞入れ申すな 三度三度と 手を足し 印明 印かんを結で 不
動の サイ来 逆字を使ふて ヌキ字を使て さしう さわりを 致す者 是有候
えば 本人料本次第に 飛附き喰い付き ムネイタ／三寸 はらのわたを ふた々々
返に返いて 元の本座に直り 立ちほうでんと 守らせ給え 何も知らん者が さわ
りまして 足げりにしても 御意見 御叱を致さん如くを 頼み参らす

(此の項がウラ敷に当る、人に聞えては良くない小声で)

三日 五日 十三日 七十五日を 是打過^スぎると 行い使ふた神は 元の 本座え
上らせ賜ふ 行い使うた字文字法は カンナキ左のタモトゑ もどらせ給え

(是より王子の幣を上にし、道タチ刀・レイ釈梵も一ツにツツム。米を一トニギリ
紙につゝみ、一円か五円も忘れずに用意する)

○次に高田の王子様だけ神送りする。小刀を七升の上に立て、おく。

王子の神送り字文

先しよう共には 高田の王子様おは 南無／スソ神の 打や鎮の是上印に 行い請じ
参らしたが 御祈持叶えて下んや されるでなけば 御祈持ヌキや持ったが 白らは
のシュヘン 刀のうづお 広くに許いて、 屋カゲ八丁杉ヶ峯迄 行い上げて参らす
る 屋カゲ八丁杉ヶ峯お 是打すぐれば 東方トブサが山迄 行い上ゲて参らす
東方トブサが山を 是打すぐては 是天竺 四千八百四十方 国の敷の御社ろ御宝殿
え 安座の位につき賜ふ 本座の位い 天ゲの位いと上りませ

オワリ 次に

是よりミテグラ一切お風呂敷にツツンで人の行かな山か、谷か川か海辺に持つて行
く。余り遠い処は無理。山ナラ大きい木の元、岩屋の元、川・谷なら水が増した時に
流れる位の場所、入るだけの場所を作り、米ツツで置く場所／を祀る。五円か一円
を底になる様に置いて、王子の幣・紙ジメを取り、他はほりいけて其の上に石をこた
して、人目に附かん様して、王子の幣を立て、紙ジメお前に張る。礼釈梵も、人目
に附かん様にかくす。道たち刀の棒を手前に立てる。

次、天神の五方立お唱えて、五印を打つ。最後の岩の印にて高田の岩の行い。

●此の岩と申すは 是天竺 四千八百八十八ヶ国の 国の御中より 高田の太万力の
岩とも 行い請じ参らす 此の岩と申すは 構え三千余丈 従えも三千余丈 いぬ
き三千余丈の 太万力の岩 此の岩 高田の太万力の岩は 地え三尺はえこもり 天
え三尺 生えぬけ申した 高田の太万力の岩にて候 東方岩の印とも 現じ渡らせ給
へ

南、西、北、中 (同文)

十二ヶ方から 高田の太万力の岩とも 行い請まいらす 其の役に 高田の太万力

「五三ウ

「五四オ

「五四ウ

の岩が ぐだけて飛で わします共 是の岩の関に ぬけ返り解け返ると云ふ事 余
も有らし候ふな 建つて守らせ賜

○谷川海等え置いた時には、弘法太師の流し式を行ふて置く。

○家に帰つてする作法。神送りお行う。

○其の時のよみわけは

○氏子仲場え 時使はれ 日の使われで 讀み解・取解・祓い解の 式法次第をする為
に 神迎を致いたが 神送しまいらする

と云ふ事を唱えて神送りをする (字文は別の項で書く)。

○次に七升の米と三合の米を小刀で切る。

日輪法 ジャリンニソバカ 月輪 ジャリンニソバカ 三回

病人祈禱を行つた時には全々違ふ也。まだ他に祈禱をする物が残つて居るから有る。

病人祈禱スソの祈り捨てのよみ解け。送りに附くと云ふクジが取れてから。

●南無スソ神 荒や岬の者をは 王柳 釈迦流 釈尊流 月読日読 提婆が流とて 柳

取り掛けて 読やみだいて 提婆が人形 十二のヒナゴゑ 読や集めて ブニ当授ケ

テ ヒケイモ取らせてござるが 御縁を切らいて ご縁をはないて 四幣がミテグラ

提婆の人形 十二のヒナゴ 敷殿 み杜 ほらの杜 一トヤ界いで 七丈下り 三

丈下り 石が堂段 木が請段 古木の元え 西宇の国 ハンセン フダラク とろり

が島 ガヤが七本 其の元 昔千年 ドウトウ上門の命の立置く スソの名所え 立

のき用合成給

〔注〕 大咒阻の取り解け祈り、又は病人でも、大咒阻の送りしづめの祈禱が必要に

なつた場合には、三階相の五色の支立てが要する。

屋地の四方のツ、マ由の他に、七ヶ処の山から七ツのこずゑ(品の違ふ木・草の枝小量)、
病人の場合には、病者のエリ先き・ソデ先・タモト先・手足の爪先・ビンの毛、イロリの
灰い・どろ・五品の穀物、札釈梵・道ちたち刀等が必要で、九字が取れたら取解の時と同
様に、タ、キ集めて祓い集めて送り、上印に高田の王子の行い、しづまるまで。

此の場合、荒敷を使って調伏して有れば、敷王子を元の社に上げたり、行い使ふた字文
は消す(消す字文有り)。

「五五オ

「五五ウ

咒阻の祭文十二通をくり返しよんで、縁切集、送る。

色々手をつくしても出来ない時には 一 双返しの本 地をくり返しよんで見る。

敷を打ち返す法は別に作法が有る。此の法は、みだりに使はん定め也り。

○南無咒阻神の集りの悪い時には、太土くう御世の祭文をよみ開いて、よみ解けて集めると集りがよいと、吉三郎書中に記て有る。余り人の知らん作法で有る。争いの文が有るからと、理解すべし。

大咒阻を取り分ける時に使ふ幣も有り、又行い上げる為に使ふ敷王子もいく通りも有る。

又荒式を行ふ時に使ふ幣や、式王子や、字文字法も、長文やみじかい字文、返す法、打上げたり、消したりする法文もいく通りも有る也り。

○咒阻の祭文月よみ流 小松家伝

正月子の日に 子の年の 檜木女に 藤の木男が 子の地 子の方 子の時に 一生

一代行かずが方 行かずが里えまいりて 神の鳥居に 血文字を書き 仏の眼に針を

差し 堂宮アライテ ヌレ手をたゝいて もゑ火をしめいて 地に伏し 天をアラヤ

ぎないて クレナイ様なる したおかみだし ムラサキ様なる 胆をはき出し 此の

調伏が 身に相い申せば 子孫たゑ行け 番孫たゑ行け 岡のホオジお水が流越せ

木竹も枯れ行け 白洲のにわが 太海に成れ 地仇 字仇 ね仇 念じる仇 界口

事 口ろん 食ぜり 職仇 金銀 女念のうらみが 有るぞと 言ふたが 云いどの

ミサキノ 立たがホノホのミサキ 南無スソ神ゑは 月よみ掛た 日よみも掛た 割

場経 わりばの祭文 割りきらためた 此ののり物に のりや移れや 太スソ神 集

り給よ 小スソ神 良におん聞き 候ゑ

二月丑の日に 丑年の檜女に 藤の木男が 丑の地の方 丑の時に 一生一代行かず

が里えまいりて、 以下同文

三月寅の日に 寅年の檜女に 藤の木男が 寅の地の方 寅の時に 一生一代行かず

が里えまいりて、 以下同文

四月卯の日に 卯年の檜女に 藤の木男が 卯の地の方 卯の時に 一生一代行かず

が里えまいりて、 以下同文

「五六オ

「五六ウ

「五七オ

五月辰の日に 辰年の檜木女に 藤の木男が 辰の地に 辰の時に 一生一代行か
ずが里えまいりて、 以下同文

六月巳の日に 巳の年の檜木女に 藤の木男が 巳の／地に 巳の方 巳の時に 一生
一代行かずが里えまいりて、 以下同文

七月午の日に 午の年の檜木女に 藤の木男が 午の地 午の方 午の時に 一生一代
行かずが里えまいりて、 以下同文

八月未の日に 未の年の檜木女に 藤の木男が 未の地 未の方 未の時に 一生一
代行かずが里えまいりて、 以下同文

九月申の日に 申の年の檜木女に 藤の木男が 申の地 申の方 申の時に 一生一
代行かずが里えまいりて、 以下同文

十月酉の日に 酉年の檜木女に 藤の木男が 酉の方 酉の時に 一生一代行かずが
里えまいりて、 以下同文

十一月戌の日に 戌の年の檜木女に 藤の木男が 戌の方 戌の時に 一生一代行か
ずが里えまいりて、 以下同文

十二月亥の日に 亥の年の檜木女に 藤の木男が 亥の方 亥の時に 一生一代行か
ずが里えまいりて 神の鳥居え 血文字書き 仏の眼え／針を差し 堂

宮 荒らいて ヌレ手をタタいて モエ火をしめいて 地に伏し 天をアラヤギない
て クレナイ様なるシタおかみ出し ムラサキ様成る胆をはき出し 此の調伏 身に
相い申せば 子孫たえ行け 番そんたえ行け 白洲の庭も 大海に成れ 岡のホオジ
お水が 流れ越せ 木竹も枯れ行け 字仇 ね仇 念じる仇 界い くじ こうろ
ん 職ぜり 職仇 金銀 女念のうらみが有るぞ と言ふたが 云いドのミサキ 立
たがホのホのミサキ 南無スソ神には 月よみ掛た 日よみも掛た 割場經文 割り
きため申した。 此ののり物に のりや移れや 太スソ神 集り給えよ 小スソ神
も 良くに御聞き候

「大スソの取分をする時意外には、月よみ流の祭文は、一月と十二月分をくわしく祈つて、
他の月の分は、以下同文の所迄で良い時も有る」

○明治三十年旧八月吉日附小松達吾書

○女柳咒阻の祭文

正月元月 太郎月に 申の年の者が 七月寅の年の者に向ふて ち敵は敵 あん
者の敵き 七代しの根の敵 よくの目 徳の目 敵と言ふて 神の戸平え 血文字を
書き 仏の眼え針を差し むらさき様なる舌をのべ出し 人は悪けれ 我が身は良け
れと云ふて 因念調伏 みさきで候ふ共 七チ本かごみてぐら 九ツが人形 七ナツ
の鳴り物 鈴沢梵 時のひけい諸物 扶に当ひけい よらめる ごあんを切らいて
ごあんをはないて さら／＼集り 用合成りたまふ

○是れ以下は月日を遺へて字文は同じ

二月二郎月に 酉年者 八月 卯の年の者に向ふて
三月三郎月に 戌年者 九月 辰の年の者に向ふて
四月四郎月に 亥の年の者 十月 巳の年の者に向ふて
五月五郎月に 子の年の者 十一月 午の年の者に向ふて
六月六郎月に 丑の年の者 十二月 未の年の者に向ふて
七月七郎月に 寅年の者が 一月 申の年の者に向ふて
八月八郎月に 卯の年の者が 二月 酉の年の者に向ふて
九月九郎月に 辰の年の者が 三月 戌の年の者に向ふて
十月十郎月に 巳の年の者が 四月 亥の年の者に向ふて
十一月十一郎月に 午の年の者が 五月 子の年の者に向ふて
十二月十二郎月に 未の年の者が 六月 丑の年の者に向ふて
○二月次郎月に 酉の年の者が 八月卯の年の者に向いて ち敵 ねがたき あん者の
敵き 七代しのねのがたきが (と云ふ様に唱える)

○呪詛 月読流の祭文 小松達吾書より

正月子の日に 子の年の青き女人に 丑の年の黒き男が揃ふて 水花三度と 蹴上げ
け下ろし ぬれ手を たゝいて 燃え火をしめいて 白ら刃をさゝげて 我れは良け
れと言いて 子孫たゑ ばん孫たゑ行けのうとわ 地に伏し 天んをおおやぎないて
因念調伏いたいた 南無咒阻神が 立ちうき申して (何の年の男女の) 玉の氏子

— 五九オ

— 五九ウ

に見いりを致いて 是れ有り候ふ共も 字文の博士が 読み分け・取り分け・祓い
解て 白きはたが七十五本 黒きはたが七十五本 黄金コガネの四幣シ みてぐら 是れのり
くらと割りや 用合ヨウカきらため申した のりくら きらうな のりあそべ のりくら
きらうな のりうつれ 白米シロコメ千石 黒米クロコメ千石 ま米マメが千石 三千石ゴウは 命メちの身替ミカヅミ
身の引きかえに／ 身替りひけいと よらめて出まいらした 是れ受取り それ受取
りて 早くに立ちのき 用合ヨウカ成り給え 昔千年 どうぞ尉門の命の 建て置き申し
た 呪咀のみ社ろゑは ねがいにたいして 送らうからでは 身はだをはづれて 立
ちのき用合ヨウカ成り給え

」 六〇オ

二月は丑の年の 青き女に 寅の年の 黒き男が揃ふて
三月は寅の年の 〃 卯の年の 〃
五月は卯の年の 〃 辰の年の 〃
六月は辰の年の 〃 巳の年の 〃
七月は巳の年の 〃 午の年の 〃
八月は午の年の 〃 未の年の 〃
九月は未の年の 〃 申の年の 〃
十月は申の年の 〃 酉の年の 〃
十一月は酉の年の 〃 戌の年の 〃
十二月は戌の年の 〃 亥の年の 〃
一月は亥の年の 〃 子の年の 〃

「四月がぬけたけれ共、一月が余分に入つて居るので差しつかゑない。一月をのければく
り上げてよめばよい。」

以下は前文を各月に附けて唱える。又は月別に読み上げて、最後に全文をよむ法方もある。

」 六〇ウ

○四節柳の呪咀祭文 小松達吾書より

春や三月 九十二のその内に 女と男が揃ふて ちがやの人形作りて あせ竹 へ竹
を取りや揃へて 我わ良けれ 人は悪けれ のうよと申して 地に伏し 天をあおや
ぎないて 因念調伏く ないたる 南無咒阻神祇が 立ちうき申して (何の年) 玉

の氏子え 見いりをなして 是有り候ふとも 字文の博士は 読み分け・取り分け・祓い分けて 送り返しに そなわり申した 白きはたが七十五本 黒きはたが七十五本 黄鎌^{コガネ}の御幣束^{ミテグサ} 是れのりくらと 割りや用合 きらため申した、のりくら嫌ふな のりやあそばせ給えや 扶仁^{フニ}当ひけいわ 白米^{シロコメ}千石 黒米 ま米が千石 命ちの立てがゑ 身のひきかゑに 身替りひけいに よらめて取らす 是れ取り 早くに身はだを 放れて 立ちのき用合なりたまへ 昔千年 当堂尉門^{トウダウモン}の尊の立ておく 咒咀のみやしるえ 願いをたいして送ろう 早くに 身はだをはづれて 立ちのき用合 成たまゑ

○夏三月九十二日 むぎわら人形^{ムギワラニンギョウ}で(以下同様)

秋三月九十二日は 一と元 植えて 千元に栄えた いなほの人形

○冬三月九十二日は 白ら紙人形^{シラカミニンギョウ}(以下同文)

○月割り咒咀の祭文 小松達吾書より

正月 女と男が揃ふて 年徳神を たてづき 我は良けれ 人は悪るけかれ 子孫がたゑ行け ばんそんなゑ行け のうとは申して 地に伏し 天をあをやぎないて 因念調伏ないたる 南無咒阻神^{ナンムシロム}が 立ちうき申して (何の年) 玉しか病者に 見いれをないて 是れ有り候ふとも 字文の博士が 読み解け・取り分け／・祓い分け 送り返しに そなわり申してござれば 神をわ 加多^{カダ}の太い字で 元のおご座え 祓い上げて まいらする 生き霊^{シキレイ} 諸神は 元の花の 精^{セイ}の体え 送返いて まいらする 南無咒阻神祇^{ナンムシロム}は 四幣^{ミテグサ}が幣束^{ミテグサ} 提婆^{テバ}の人形 是れのりくらと 割りや用合 割りきらためは申した。のりくら嫌ふな のりうつれ のりくら嫌ふな のりやあそばし賜え

昔 当堂尉門^{トウダウモン}の尊の すその名処え 願いに たいして 安座・本ざのくらしいに 附かしてまいらする 身はだを 放いて 立ちのき 用合なりたまゑ。

○二月に女と男が揃ふて 屋内の神を しようこにたてついで (以下は前文を唱える) 「六二オ

○三月に女と男が揃ふて 三宝荒神に

○四月女と男が揃ふて 夏^{ナツ}のたねおろしの 神をたてついで

○五月に女と男が揃ふて おさばいの神を たてについて

○六月に女と男が揃ふて 祇園牛頭天王様を たてづいて

○七月に女と男が揃ふて 太師たなばた たてについて

○八月に女と男が揃ふて 地神・公神を 証固に

○九月に女と男が揃ふて 道ろく神にたてづき

○十月に女と男が揃ふて 内ちの神をたてについて

○十一月に女と男が揃ふて 倉入れの神にたてについて

○十二月に女と男が揃ふて いづめの明神をたてについて 我わ良けれ 人は悪けれ

子孫たゑ行け (以下前文)

○呪咀を読み集めて、送りに附くようになってからの字文。是の法は 病人祈禱に使ふ。

○南無呪咀神をわ 読み分け・取り分け・祓い分けを しまいらして 安座本座につけ

て 其ののちに 呪咀の戻り返りは 是れ有り候ふな 戻り返りが 是有るならば

一スソもどれば 二たすそかえす 二呪咀戻れば 三スソと返す (十スソまで) 十

呪咀と戻れば 十二 十三スソとも相いそゑ 送り返いてまいらする まだにて戻り

返りが 是れ有るなれば 一式戻れば 二數返す 二しき戻れば 三式返す (以下、

十數まで) 十式戻れば 十二 十三數も相いそえて 送り返いてまいらする かや

りくるな もどりくるな 戻り返りが 是有るならば 七色雨で 洗い流いた道に

は 水いごんだらりを 関きすえた 関の草では 関き止めた 戻りくるな 返りく

るな 戻りかやりが 是有るなれば 門には 戸平の太神を関きすえた 関の草では

関き止めた。 戻り来るな 返りくるな 戻りかやりが 是れ有るなれば 戸口に

吉上梵字の札を 打ち立てた 関の草でわ関止た 戻りくるな かやりくるな 戻

りかやりが 是れ有るならば 内には げん者の釦を 行いすえた 東方 げん者が

釦ぎを 行いおろす (以下五方同文に唱える)

関の草では 関き止めた 関きもんまくの 大神と せきすゑた 戻り返り 是有る

な 関の草でわ どうく返しに 送り鎮めてまいらする。

集めて祀り込んだみてぐらを、紙につゝんで荷物にする必要なければ、他の幣束も集めてくゝる。王子の幣は残す。

○是より先は、スソを集めて送るれいぎによむ祭文 (是の作法は病人祈禱の時に)

「六二ウ

「六三オ

「六三ウ

○藤堂尉門の子孫の博士が参りて 南む呪咀神の送り返へしに そなわり申して 諸式

の祭文 口傳と 読み分け・取り分け・切り解・祓い分けて 四幣がみてぐら 提婆

の人形 是れよりくらゑ 拂いもたしてまいらす 此のミテグラゑ のりや移れ

のりや急ぎ給え 日本唐土 天竺 三ガ長 み塩界い 三三丈下りて はんせん ふ

だらく とろりが島ゑ 昔し千年 藤屋尉門の尊の建て置く 石が堂段 木がせい

だん がやが七本 其の元 ひわだの切りぶき のしぶき ひおんがみやしろ 咒咀

の名処え 送り鎮めてまいらす 其のちに 咒咀の戻りに 咒咀の返りは 余も

有るな 戻り返りが 是れ有るなれば 七色雨では 洗い流いた 道には すいごん

だらりを 関すゑた 戻り来るなよ 返りくるな まだにて 戻り返りが 是有るな

れば くらみの太神をも 打ち掛ける 釵ぎの太神をも 打ちかける 金巻太神を

打ちかける みつの太神を 打ちかけられて 其のちに 千が千年 万が万年 く

れても 戻り返りは余も有るな おんところゝいんにソバカ(三三べん返す)

「カスミの印・釵ぎの印・金巻の印有り」(スソ集メテシバルノニ使フイン)

「六四ウ

○祈祷に使用した幣束を小縄で(コナワ)で敷き紙につゝんで、しばつて任末する法。

おんしばる めんしばる かようにかけて ぐれん けんばい かすみの印で しっ

かと結んで はつかをかける やく金な目の印と こい下ろす 此の印明・印勸と申

すは 三日三時 七日 十三 七十五日が 其の間 指をぬいて 此の印解けず 川

を渡りて 此の印とけず 硯や法者が 三ツ目ざり そうしんざりの 相いかぎ ご

ざなく候う 「ぜつめい金目にソバカ」「」の中の字三べん返す

○にもつにとゝのえた送り物を、座においてしばる上わいんの字文。

東方 アミの印共 現じ渡らせ給え (五方え同じになえる)

「六五オ

○あみの印(両手の手を下に向けて、指を交互に組み合し、第二かん節で組むと、各指の間にすきまが出来る形)

○東方岩の上ごを指す(五方同じ法にて)

左手下向けて、おや指の爪を人差指にてかくす様に五本の指でつゝの形ににぎり、右手人差と仲指をのばし、他はにぎりて、左手のつづにさし込む形。

○東方岩の逆しの印とも 現じ渉らせ給え(五方)

にぎった左手のつゝに、右の手の印を下より差。

○東方岩の戸を立てる とびらの印とも げんじ渉らせ給え 五方同じに

左手の形は其のまゝに、右手の親指は折りて、他の四本をのばして下に向け、右手いで上より押す形。

○しまつしたみてぐら一切を川え流す時の作法

先水神様を米ツプで祀つて、南海トドロが島え送り流いて下さる様に祈願して、

○弘法大師の流し式の法にて流す

是天竺辨財天王様の しまゑかなん かいとろくに 流れ行くとも

○東し とう方 べん財天王様の むねのれんげを 七ツにかき割る 八ツに かき割

り 水敷と 行いおろいて参らする 南無咒咀神を 南海とゞろが島え 行い流すぞ
流させ賜え

○（注沢）此の法は読分次第にて何にて流れる法也り） 南み南方 西しさい方 北
がほつ方 中が中方と 五方から行いかけて 流す法で有る（海が近ければ 海え持
つて行く）

○川も海も遠ければ、人の行かん処え持つて行き、岩の元か大木の元に、先づ地神・荒
神・山の神に布米蒔きて、ことわり祀りをしておいて、上に土や木の落葉をかむせ、日光
に当らん如にして、天神の五方だてに打ち鎮め、三日、三時、十三日、七十五日が打ち過
ぎれば、行い使ふた神は元の杜ろえ、使ふた字文は、覗き博士の左のたもとえもどり、悪
魔下道はもとのすみかえ立ち行く如くに言い附けて、帰宅。天神の五方だてで、座鎮をし
て神送り。布米切りをして、祈禱がおわる事に成る。

くわしくは病人押加持祈りの本に書いて有る。

「 六五ウ

「 六六オ

「 六六ウ

「 裏表紙
見返し